

平成 22 年度 学位論文

青年期における信頼感と攻撃性の関連  
—TAT を用いた検討—

兵庫教育大学大学院  
学校教育研究科 学校教育学専攻  
臨床心理学コース M09066E  
治井 彩

# 目次

## 第1章 問題と目的

|     |                     |   |
|-----|---------------------|---|
| 第1節 | はじめに                | 1 |
| 第2節 | 攻撃性について             | 1 |
| 第3節 | 攻撃性の男女差について         | 2 |
| 第4節 | 信頼感と攻撃性について         | 3 |
|     | 信頼感について             |   |
|     | 精神分析における信頼感と攻撃性について |   |
|     | 近年の信頼感と攻撃性に関する研究    |   |
| 第5節 | 攻撃性を捉える投影法          | 6 |
| 第6節 | 本研究の目的              | 8 |

## 第2章 方法

|     |        |    |
|-----|--------|----|
| 第1節 | 調査1    | 9  |
|     | 目的     |    |
|     | 協力者    |    |
|     | 質問紙の構成 |    |
|     | 手続き    |    |
| 第2節 | 調査2    | 10 |
|     | 目的     |    |
|     | 協力者    |    |
|     | TATの構成 |    |
|     | 手続き    |    |

## 第3章 結果

|     |                   |    |
|-----|-------------------|----|
| 第1節 | 信頼感尺度ならびに攻撃性尺度の検討 | 14 |
|     | 信頼感尺度             |    |

|              |                                     |    |
|--------------|-------------------------------------|----|
|              | 攻撃性尺度                               |    |
| 第 2 節        | TAT における攻撃性の得点化について                 | 18 |
| 第 3 節        | 男女差の検討                              | 19 |
| 第 4 節        | 信頼感尺度と攻撃性尺度の関連                      | 20 |
| 第 5 節        | TAT における攻撃性と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度との関連      | 21 |
|              | ACS 得点と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度との関連           |    |
|              | 信頼感尺度ならびに攻撃性尺度得点に対する性別と ACS 得点の交互作用 |    |
| 第 6 節        | TAT の内容分析と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度との関連        | 28 |
|              | 群分けの方法                              |    |
|              | 「攻撃性」、「他人への信頼」での群分け                 |    |
|              | 「攻撃性」、「自分への信頼」での群分け                 |    |
| <b>第 4 章</b> | <b>考察</b>                           |    |
| 第 1 節        | 信頼感尺度ならびに攻撃性尺度の検討の考察                | 39 |
| 第 2 節        | 信頼感尺度と攻撃性尺度の関連の考察                   | 40 |
| 第 3 節        | TAT における攻撃性と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度との関連の考察   | 41 |
| 第 4 節        | TAT の内容分析と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度との関連の考察     | 47 |
|              | 「攻撃性」、「他人への信頼」での群分け                 |    |
|              | 「攻撃性」、「自分への信頼」での群分け                 |    |
| 第 5 節        | 総合考察                                | 53 |
| 第 6 節        | 今後の課題と展開可能性                         | 57 |
| 引用文献         |                                     | 58 |
| 要約           |                                     | 63 |
| 添付資料         |                                     |    |
|              | 調査協力の依頼書                            |    |
|              | 個別実施の調査で用いた調査協力の同意書                 |    |
|              | 質問紙調査で用いた質問紙                        |    |

# 第一章 問題と目的

## 第1節 はじめに

近年、信頼感と攻撃性、攻撃行動、自傷行為などの関連についての調査研究がいくつかなされておられ、その関連が量的に示されつつある（Hale et al,2005；葛西・中本,2008；清瀧,2008；谷本・笠井,2008 など）。しかしその関連について質的に検討した研究は見当たらない。よって本研究では信頼感と攻撃性の関連について、質問紙と投影法を用いて量と質の両面から検討することを目的とする。

## 第2節 攻撃性について

攻撃の代表的な定義は「他の個体に対して危害を加えようとする意図的行動」（大淵,1993）という定義である。一方、攻撃性は攻撃行動の背後にある心理機制も含むものとして考えられ、その心理機制の考え方の違いによって捉え方も異なる。その多義性について鹿野（1979）は、攻撃性という語に含まれるものは、行動と情緒に区別できると述べている。また、顕在的な行動や情緒を表すばかりでなく、敵意のような潜在的なものも記述することができるという。大淵（1993）によると、多様な見解は内的衝動説、情動発散説、社会的機能説の3グループに分けることができる。内的衝動説の代表者は、攻撃性を死の本能から派生したものと捉えた Freud(1920)と、動物の行動観察から攻撃中枢が存在すると考えた Lorenz(1963)である。情動発散説の代表者は、攻撃を不快な経験によって生じた欲求不満の発散とみなす Dollard(1939)らである。社会的機能説の代表者は、攻撃反応を学習によっ

て形成されるものとみなす Bandura(1973)や、攻撃行動を葛藤場面に対する人々の対処行動の1つとみなす Rule(1983)らである。

心理臨床の分野では、暴力などの形で表に現れる攻撃性よりも、さまざまな精神障害の背後にある無意識的攻撃性に注目することが重要と指摘されている(西園・狩野,2002)。例えば鈴木・安齊(1999)は、大学生対象の調査研究において、抑うつ群は外面的には他責性を抑制するが、内面的には非抑うつ群よりも他責的であることを明らかにしている。また上野・丹野・石垣(2009)は大学生対象の調査研究によって抑うつが強い場合は非表出性攻撃性が強く表出性攻撃が弱いことを明らかにしている。これらのことから攻撃性は必ずしも攻撃行動として現れないと言え、背後にある心理機制としての攻撃性に焦点を当てることは重要であると考えられる。

### 第3節 攻撃性の男女差について

西田(1984)は攻撃性の性差について、男性が女性よりも攻撃的であることは生物学的事実として認識されてきたが、文化や社会構造がそれらの発現や表現様式を強調したりデフォルメしたりすると述べている。

松見(2002)によると、攻撃性の性差研究が盛んなアメリカでは、性差は子どもにおいても大人においても、調査研究によって検証されている。大学生を対象とした実験のメタ分析では、男子は女子よりも身体的、心理的攻撃行動の両方において攻撃性が強いことが確認され、女子は攻撃行動によって他者に苦痛を与えることに対して、男子よりも強い不安と後悔の念を抱くことが明らかにされている(Eagly&Steffen,1986)。

また、攻撃性の男女差の原因は、性役割規範、攻撃行動の結果に関する信念の相違および攻撃行動の社会的随伴性の相違などにあるという(松

見,2002)。

## 第4節 信頼感と攻撃性について

### 信頼感について

Erikson(1959)によると、基本的信頼感 (sense of basic trust) とは人生で最初の発達課題として獲得が期待されるものであり、乳幼児期の母子関係を通して形成され、発達にともない変化しながら生涯にわたっての課題となる。信頼という状態は、「自分の外にいる提供者たち(outer providers)の同一性と連続性を当てにすること」だけではなく、「提供者が警戒したり立ち去る必要もないほどに、自分自身を十分信頼するに足るものであるとみなすこと」を意味するという (Erikson,1959)。

哲学者の和辻 (1962) は、信頼とは救いの期待であり、他者は危害を与えるものではなく、救いを求める相手であり、嘘を教えず約束を守るといような感覚であると述べている。またその信頼は、過去の信頼関係を根拠に不定の未来に対して決定的態度を取ることによって起こるといふ。そして信頼の欠如は、起こるべき誠実さが起こらないことによって生じるという。

天貝 (1995) はそれらの知見を踏まえ、信頼感尺度を作成した。そして、信頼感を「人や自分自身を安心して信じ、頼ることが出来るという気持ち」と定義した (天貝,1999)。また、信頼感とは個人の健康なパーソナリティの発達と密接に結びつき、安定した信頼感を持つ場合、人は他者をより支持的であると感じ、対人問題を感じる事が少ないという (天貝,1995)。そして、攻撃的行動を含む問題行動を起こす人は、他者と良好な関係を築きにくく猜疑心が強いと言われている (清瀧,2008)。

## 精神分析における信頼感と攻撃性について

精神分析の分野においては、Freudを始めとする多くの分析家が攻撃性について論じてきた(福島,1974)。そこでは精神障害が示す行動としての攻撃性についてよりも、精神病理の発生にあたって欲動としての攻撃性がどのような役割を果たしているか、どのような機制が働いているか、がより重要な問題として位置づけられてきた(岩崎,1979)。

Horney(1937)は、基本的不安(basic anxiety:自分が敵意に満ちた世界にたった一人で無力であるという感情)が敵意の背後にあると述べている。対人関係論のHorneyは、Freud(1920)の死の本能を批判し、人間関係の障害を重視して、攻撃性を自己の安全を守ろうとする個人の反応と捉えている。そして「多くの神経症患者が特定の事態で示す攻撃性は、しばしば、敵意の直接的表出と受け取られているが、実のところ患者は、攻撃を受けたという感情に動かされて、自分の臆病さの上を強引に進撃しているにすぎないことが多い。」と述べ、敵意の背後にある基本的不安を重視した。基本的不安が敵意に影響するという一方向だけでなく、敵意と不安は相互作用し、強化しあうと述べている(Horney,1937)。

一方、対象関係論のKline(1946)は、攻撃性を生得的なものと捉え、乳児は死の本能に由来する敵意を持つ悪い自己を対象に投影して、悪い対象から迫害される不安が生じ、よい対象を守るために対象を分裂するとした。自己の敵意は対象に投影され、迫害される不安となり、攻撃されていると感じるという形で再摂取され、それによって生じる敵意を再投影する。このような敵意と迫害される不安が相互に循環するメカニズムをKlineは投影同一化(projective identification)と呼んだ。

Horney(1937)が攻撃を対処行動と捉えているのに対してKline(1946)は生得的なものと捉えているが、攻撃されるのではないかという不安と敵意が

相互に循環するという点においては類似している。

また、Bowlby(1980)は Kline(1940)の攻撃と不安に関するいくつかの仮説は生物学的な知見と相容れないと述べ、愛着対象喪失経験(loss)を生後 1 年間の出来事に限定していることに異議を唱えている。そして、幼児期から数年間さらには青年期にいたるまでの期間における愛着対象の喪失によって、分離不安(separation anxiety)や悲嘆のみならず、再会を目指す攻撃性を含んだ悲哀(mourning)の過程が発生すると述べている。

### 近年の信頼感と攻撃性に関する研究

最近の研究では、Hale et al (2005)、葛西・中本 (2008)、清瀧 (2008)、谷本・笠井 (2008) が質問紙調査によって信頼感と攻撃性の関連を検討している。

Hale et al (2005) は中学生・高校生を対象に、親からの拒絶を認知することが攻撃性に与える影響を検討している。攻撃的行動の測定には a self-report questionnaire(Björkqvist,1992)を用い、親からの拒絶の認知の測定には Level of Expressed Emotion questionnaire (Gerlsma and Hale,1997) の下位尺度である敵意的批判を用いた。その結果、親からの拒絶の認知が、抑うつを介して攻撃行動に影響を与えるというモデルが示された。

葛西・中本 (2008)は高校生を対象に、怒りや攻撃性の現れ方と信頼感の関連を検討している。怒りの測定には STAXI 日本語版 (鈴木・春木,1994) を用い、攻撃性の測定には日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(安藤ら,1999) を用い、信頼感の測定には対人信頼感尺度 (堀井・槌谷,1995) と信頼感尺度 (天貝,1999) を用いている。その結果、「不信」は「敵意」と関連があり、「身体的攻撃」や「言語的攻撃」とは関連がないことが示された。また「自



分への信頼」が「言語的攻撃」と関連があり、「敵意」と負の関連があることが示された。さらに、「他人への信頼」は「敵意」と「身体的攻撃」に負の関連があることが示唆された。これらの結果からは、外界への不信感の高さは攻撃行動を行うかどうかよりも、敵意の強さに関係しているということが言え、自他への信頼感の低さは攻撃行動と敵意に関係していると言える。

清瀧(2008)は大学生を対象に、対人信頼感と攻撃行動および自傷行動の関連を検討している。対人信頼感の測定には信頼感尺度(天貝,1999)を用い、攻撃行動の測定には日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(安藤ら,1999)の「身体的攻撃」「言語的攻撃」を用い、自傷行為の測定には自傷行為経験について5件法で回答を求めている。その結果、「自分への信頼」と「不信」が「言語的攻撃」に影響を与えていることが明らかになった。また「不信」が自傷行為に正の影響を与え、「自分への信頼」が負の影響を与えることが示された。

谷本・笠井(2008)は大学生を対象に、人間信頼感と攻撃性の関連を検討している。人間信頼感の測定には対人信頼感尺度(堀井・槌谷,1995)を用い、攻撃性の測定には攻撃性尺度(安立,2001)を用いている。その結果、全ての下位尺度に相関があることが明らかになった。特に対人信頼感の「不誠実」と攻撃性の「猜疑」に強い相関が認められた。

## 第5節 攻撃性を捉える投影法

高橋(1986)は、パーソナリティ理解における投影法の有用性について述べている。対象者自身のパーソナリティの意識・言語化レベルを、①パーソナリティの上層にあって対象者が明確に意識し言語化できる内容、②対象者があいまいに意識していたり漠然と感じていて明確に言語化できない内容、③

パーソナリティの無意識層にあって対象者が認知できない内容、の3つに分けていて、投影法がパーソナリティの無意識層を理解するのに有効と述べている。

攻撃性を捉える投影法の1つに Thematic Apperception Test : 絵画統覚検査 (以下 TAT) がある (板谷,1984)。安立(1999)は、TAT は絵を見て自由に物語を作るので、絵画刺激のとらえ方・物語の作り方の中に対象者の内的世界の投影が期待されると考えられており、対象者の内的世界にアプローチする手段としてふさわしい、と述べている。

TAT における攻撃性について、大淵 (1977) は TAT 反応と攻撃性の関連についてレビューしている。全体として研究結果は統一的ではないが、攻撃の抑止の強さは行動と TAT の攻撃表現を相補的にさせるという葛藤モデルは有力であるという。また、斉藤(1995a)は TAT における攻撃的空想と実際の攻撃行動や攻撃的人格との間にはある程度の関連性が見出されることもあるが、必ずしも一義的・直線的な関連は認められないと述べている。その上で、非行少年を対象とした事例研究により、TAT における冷情性反応は他者に対する共感性、人間的暖かさの欠如を示唆すると述べている。斉藤 (1995b)は、冷情性を伴うテーマとして復讐、生体解剖、人体実験、毒殺、などを挙げている。

鈴木 (1997) は TAT から明らかにされるパーソナリティの側面を一覧にしている。人との関わり方の一般的傾向としての攻撃性に関して、攻撃の行為は点であり、非行為の状態では他者否定的態度は他者不信のような受動的な様態で存在するのではないかと述べている。そして「より詳しく言えば、支配的態度は、被拘束や被支配への敏感さとして、攻撃的な態度は自己が攻撃されるという被害感や攻撃に備えての警戒心として存在しているのではないか」と述べており、TAT の反応に現われるのもそのような受動的な様

態であるという。土井（2002）は調査研究において、刺激を目の前にしたときにどのような心の動きが生じ、何を読み取り、どのように物語として呈示するかという観点から TAT を用い、攻撃性がどのような形で現れ、どのように体験されているかを検討している。

これらのことから、TAT 反応と実際の行動やパーソナリティは直接的には結びつかないものの、内的な体験を検討するために有用であると考えられる。

## 第 6 節 本研究の目的

近年の量的研究からは、信頼感と攻撃性に関連があることが指摘されているが、それらの関連について投影法を用いて検討している質的研究は見当たらない。したがって本研究では、他者や自己、外界に対する信頼感と攻撃性との関連を、質問紙と投影法によって多面的に検討することを目的とする。

## 第 2 章 方法

### 第 1 節 調査 1

#### 目的

信頼感と攻撃性に関する質問紙調査を実施する。

#### 協力者

(協力者 1)

A 大学の授業に参加した学部生 51 名 (男性 14 名, 女性 37 名, 平均年齢 19.4,  $SD=0.57$ ) に協力を得た (信頼感尺度と攻撃性尺度について確認的因子分析を行うため、質問紙の協力者を増やす目的で行った)。

(協力者 2)

A 大学の学部生と院生の参加するいくつかの授業で、個別実施の調査の協力者を募集し、48 名 (男性 9 名, 女性 39 名, 平均年齢 20.9,  $SD=1.99$ ) に協力を得た。

#### 質問紙の構成

①フェイスシート (所属コース・学年・年齢・性別)

②信頼感尺度 (天貝,1997) 「不信」(8 項目) 「他人への信頼」(5 項目) 「自分への信頼」(5 項目) の 3 下位尺度からなる。18 項目。6 件法。標準化時の対象は高校 1~3 年生の男女 850 名で、24 項目が選定された。その後、10 代~80 代以降までの 1512 人を対象に、青年期から老年期における適応可能性が検討され、18 項目が選定された。

③攻撃性尺度 (安立,2001) 「対象攻撃行動」(8 項目) 「積極的行動」(9

項目)「自責感」(7項目)「自己破壊行動」(5項目)「猜疑心」(4項目)の5下位尺度からなる。33項目。6件法。標準化時の対象は大学生の男女343名であった。

### 手続き

協力者1には授業終了後、質問紙を集団実施した。協力者2には質問紙を個別実施した。

## 第2節 調査2

### 目的

投影法(TAT)を実施する。

### 協力者

調査1の、協力者2の48名(男性9名,女性39名,平均年齢20.9,SD=1.99)。

### TATの構成

Murray版TATを用いた。

TAT 図版は攻撃的な群と非攻撃的な群を区別するのに有効である図版8 BM・11・3 BM (Stone,1956)、外界を支持的と見ているか脅威的と見ているかが識別できる図版18 BM (安香,1997)、安定した人か不安定な人か(安香,1997)自他についての信頼感(遊間,2009)等について有用なカードであると言われている図版19、基本的な図版1・2・20を使用した。分析に使用する図版3 BM・8 BM・11・18 BM・19の反応領域と解釈

のポイントをまとめたものを表1に示す。

### 手続き

TATを個別実施した。TATの教示は、坪内(1984)、安香(1997)を参考にし、以下のように行った。「これから絵を見て物語を作ってもらいます。この絵の中の人物は今何をしていて、どんな気持ちで何を考えているのか、この絵の前には何があって、これからどうなっていくのか、お話の筋をつけて話してください。5分くらいでなるべく詳しく話してください。」

TAT反応は調査協力者の了承を得てICレコーダーで記録し、後に逐語録を作成した。1人あたりの調査時間は15分～50分であった。

表1 分析に使用する図版の反応領域と解釈のポイント

| 図版  | 反応領域(坪内,1984) | 解釈のポイント(坪内,1984;安香,1997;遊間,2009)  |
|-----|---------------|---|
| 3BM | D=うずくまった人物    | <ul style="list-style-type: none"> <li>否定的自己イメージを探索するカードである(坪内)</li> <li>被験者がどういう自己像を持っているかの投影が期待される(安香)</li> </ul> |
|     | d=ピistol様のもの  | <ul style="list-style-type: none"> <li>否定的な状況が何によってもたらされたか。このあとどうなるか(安香)</li> </ul>                                 |
|     | Dd=画面の暗さ      | <ul style="list-style-type: none"> <li>ピistol様のものごの処理。自殺テーマか外への攻撃テーマか(坪内)</li> </ul>                                |

|      |   |  |
|------|---|--|
| 8BM  | <p>D=少年・手術場面<br/> d =ナイフ・ライフル<br/> Dd=本棚（または窓）・<br/> 横たわっている人の<br/> 裸・ランプ・ベッド・<br/> 光の帯</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 攻撃性という主題がどう扱われるか。攻撃性の方<br/> 向・対象・次元（顕在か潜在か）が大事な事柄とな<br/> る（安香）残忍性を顕在化する特性がある（生きて<br/> まま解剖するなど）（坪内）</li> <li>・ 複雑な刺激を統合できるかで知的側面を検討する<br/> （坪内）</li> </ul>  |
| 11   | <p>D=ドラゴン・動物<br/> d =崖・道・岩・橋・<br/> 森<br/> Dd=ドラゴンの穴・ド<br/> ラゴンの点・逃げる<br/> 人・画面の暗さ</p>       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 心の奥にある語り手固有の危機イメージが象徴的に<br/> 顕現される。ドラゴンに食べられる（グレート・マ<br/> ザーのイメージ）・天変地異（アイデンティティの<br/> 危機）・迷子や餓死（自殺・放浪願望）（坪内）地<br/> 震・山崩れは不安が存在すると考えてよい（安香）</li> <li>・ 被験者が自分では気づいていない無意識の層での攻<br/> 撃性が主題として表れやすい（安香）被験者のコン<br/> トロールできない衝動・救助欲求（坪内）</li> </ul>             |
| 18BM | <p>D=男性・手<br/> d なし<br/> Dd=乱れた衣服・画面<br/> の暗さ</p>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 被験者が自分の周囲を支持的と見ているか脅威的と<br/> 見ているか（支えられているか襲われているか）（安<br/> 香）</li> <li>・ 他人の攻撃に対しての不安やコントロールの力や負<br/> けてしまう脆弱性などの程度を打診できる（坪内）</li> <li>・ 訳の分からない圧力が男性の心の内部に生じている<br/> のか、手のある背後に存在しているのか（坪内）</li> <li>・ 精神科入院歴のあるものは、復讐や拘禁といったテ<br/> ーマが多かった（坪内）</li> </ul> |

D=小屋, 船

d = 雪の窓・黒い形のもの・フクロウのようなもの

Dd=窓の中のもの・水, 波, 雪・雲・煙突・画面の暗さ

- ・ 抽象刺激の処理の仕方から、現実場面でのあいまい状況に対する適応力が分かる。抽象画という反応や反応拒否は、バイタリティの脆弱さを暗示する（坪内）全体を抽象画とする短い反応→逃げの反応 or 知能の低さ（遊間）
- ・ 絵全体を雪景色の中の家で窓から見える内部は暖かく居心地よさそうと見るか、荒れた川もしくは海で船が漂っていると見るか。前者は安定した人、後者は不安定な人（安香）雪の景色は安定し肯定的感情を持つ適応した人、水の景色は不安定で自他についての信頼感を持つことができない人（遊間）
- ・ 小屋の屋根の上の部分を炎と見る反応は衝動性とか不安を考えてよい（安香）お化けあるいは怪物がにらんでいる→外界を脅威的に感じる猜疑的な不安（遊間）



## 第3章 結果

### 第1節 信頼感尺度ならびに攻撃性尺度の検討

調査1の協力者（男性23名、女性76名の合計99名、平均年齢20.2, SD=1.64）を分析対象とし、信頼感尺度（天貝,1997）と攻撃性尺度（安立,2001）について、先行研究に基づき確認的因子分析を行った。

#### 信頼感尺度

「不信」の項目を逆転項目とし、天井効果が見られた1項目と因子負荷量が.45以下であった5項目を除き、先行研究により因子数を3に指定して因子分析を行った。（主因子法, Varimax回転）。

その結果、第一因子は項目7「所詮、周りは敵ばかりだと感じる」、項目3「これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる」などの、天貝(1997)の尺度における「他人への信頼」の項目と、項目4「今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う」などの、天貝の尺度における「不信」の項目で構成された。この因子に含まれた「不信」の項目は、他人への不信とも読み取れるものであったため、因子名を「他人への信頼」とした。

第二因子は項目14「私は、私自身が、信頼に値する人間だと思う」、項目12「私は、自分自身を、ある程度は信頼できる」などの、天貝(1997)の尺度における「自分への信頼」の項目で構成されたため、因子名を「自分への信頼」とした。

第三因子は項目が1つであったため、削除することとした。

Cronbach の  $\alpha$  係数は「他人への信頼」が.865、「自分への信頼」が.787

であった(表 2)。

## 攻撃性尺度

フロア効果が見られた 2 項目と因子負荷量が、45 以下であった 7 項目を除き、先行研究により因子数を 5 に指定し、因子分析を行った(主因子法、Varimax 回転)。その結果、安立(2001)の尺度の「自己破壊行動」にあたる因子がなくなり、「対象攻撃行動」にあたる因子が 2 つに分かれた。

第一因子は項目 19「何かにつけ、心が傷つくことが多い」、項目 18「他人が不快そうにしていると、自分が悪かったのではないかと思う」などの、安立(2001)の尺度における「自責感」の項目で構成されたため、因子名を「自責感」とした。

第二因子は項目 10「やりたいと思ったことは行動に移すほうである」、項目 11「どちらかと言えば活動的なほうである」などの、安立(2001)の尺度における「積極的行動」の項目で構成された。積極的であると捉えられる項目が多かったため、因子名を「積極性」とした。

第三因子は項目 32「人に対して、疑い深いところがある」、項目 30「他人のことを、心から信用することはできない」などの、安立(2001)の尺度における「猜疑心」の項目で構成されたため、因子名を「猜疑心」とした。

第四因子は項目 4「特定の誰かが気に入らなくて、反抗的な態度を取ることがある」、項目 2「腹の立つことをされると、後々まで根に持つ方である」などの、安立(2001)の尺度における「対象攻撃行動」の項目で構成された。この因子の項目は特定の対象に対する怒り反応と捉えられる項目が多かったため、因子名を「怒り反応」とした。

第五因子は項目 8「すぐに相手の言葉尻をとらえて、つかかかってやりたくなる」、項目 6「批判や忠告をされると、内心恨んでしまう」などの、安

立(2001)の尺度における「対象攻撃行動」の項目で構成された。この因子の項目は衝動的な内容の項目が集まったため、因子名を「衝動性」とした。

Cronbach の  $\alpha$  係数は「自責感」が.829、「積極的行動」が.810、「猜疑心」が.855、「怒り反応」が.769、「衝動性」が.758であった(表 3)。

表2 信頼感尺度の因子分析結果

| 質問項目(11項目) a)                                   | 因子負荷量 |               |
|---|-------|---------------|
|   | 因子 I  | 因子 II         |
| <b>因子 I : 他人への信頼(<math>\alpha=.865</math>)</b>  |       |               |
| 7 所詮、周りは敵ばかりだと感じる。                              | .778  | .187          |
| 3 これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる。                  | .725  | .307          |
| 18 私は、自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信を持っている。   | .663  | .188          |
| 4 今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う。                  | .659  | .132          |
| 17 過去に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが怖くなっている。        | .635  | .158          |
| 2 私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う。                | .529  | .510          |
| 15 一般的に、人間は信頼できるものだと思う。                         | .493  | .409          |
| <b>因子 II : 自分への信頼(<math>\alpha=.787</math>)</b> |       |               |
| 14 私は、私自身が、信頼に値する人間だと思う。                        | .228  | .806          |
| 12 私は、自分自身を、ある程度は信頼できる。                         | .320  | .677          |
| 11 私は私で、決して他人にはとってかわることのできない存在であると思う。           | .158  | .656          |
| 1 無理をしなくてもこの先の人生でも、私は信頼できる人と出会えるような気がする。        | .130  | .543          |
| <b>寄与率</b>                                      |       | 26.102 20.568 |
| <b>累積寄与率</b>                                    |       | 26.102 46.670 |

a) 分析の過程で削除された項目

- 5 私の地位や立場が変われば、私自身も今とはまったく違う人間になるだろう。
- 6 私は現実に信頼できる特定の他人がいる。
- 8 相手が自分のことを大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるからだ。
- 9 私は自分の人生に対し、なんとかやっていけそうな気がする。
- 10 人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう。
- 13 気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込もうとするだろう。
- 16 自分で自分をしっかり守っていないと、壊れてしまいそうな気がする。

表3 攻撃性尺度の因子分析結果

| 質問項目 (24項目) a)                                | 因子負荷量  |        |        |        |        |
|---|--------|--------|--------|--------|--------|
|   | 因子 I   | 因子 II  | 因子 III | 因子 IV  | 因子 V   |
| <b>因子 I : 自責感(<math>\alpha=.829</math>)</b>   |        |        |        |        |        |
| 19 何かにつけ、心が傷つくことが多い。                          | .750   | .148   | .090   | .072   | .225   |
| 18 他人が不快そうにしていると、自分が悪かったのではないかと思う。            | .670   | .013   | -.001  | -.018  | -.095  |
| 22 自分はだめな人間だと思う。                              | .651   | -.298  | .178   | .070   | .091   |
| 23 過去のことを振り返って後悔することが多い。                      | .622   | -.136  | .127   | .227   | .019   |
| 20 他人とのトラブルがあると、自分を責めるほうである。                  | .609   | .150   | .173   | -.043  | -.064  |
| 26 自分を傷つけたくなる時がある。                            | .500   | .030   | .371   | .095   | .319   |
| 24 他人に調子を合わせすぎて、疲れてしまうことが多い。                  | .454   | -.057  | .372   | .081   | .206   |
| <b>因子 II : 積極性(<math>\alpha=.810</math>)</b>  |        |        |        |        |        |
| 10 やりたいと思ったことは行動に移すほうである。                     | .086   | .894   | -.043  | -.020  | -.101  |
| 11 どちらかと言えば活動的なほうである。                         | -.070  | .756   | -.116  | -.108  | -.026  |
| 9 自分のやりたいことに向かって突き進んでいくほうである。                 | .053   | .638   | -.027  | .216   | -.114  |
| 12 何事にも恐れず立ち向かっていく方である。                       | -.122  | .634   | -.074  | -.097  | -.110  |
| 13 正しいと思うことは人にかまわず実行する。                       | .039   | .492   | -.023  | .108   | .012   |
| <b>因子 III : 猜疑心(<math>\alpha=.855</math>)</b> |        |        |        |        |        |
| 32 人に対して、疑い深いところがある。                          | .296   | -.044  | .813   | .132   | .116   |
| 30 他人のことを、心から信用することはできない。                     | .215   | -.250  | .731   | .131   | .174   |
| 33 周りの人が敵に見えてしまうことがある。                        | .287   | .056   | .645   | .186   | .383   |
| 31 親しみを寄せすぎると人には、警戒してしまう。                     | .251   | -.220  | .451   | -.085  | .391   |
| <b>因子 IV : 怒り反応(<math>\alpha=.769</math>)</b> |        |        |        |        |        |
| 4 特定の誰かが気に入らなくて、反抗的な態度を取ることがある。               | -.010  | .056   | .268   | .718   | .146   |
| 2 腹の立つことをされると、後々まで根に持つ方である。                   | .412   | .064   | .150   | .624   | -.033  |
| 5 腹の立つことをされると、にらみつけてやりたくなる。                   | .082   | .162   | -.170  | .602   | .264   |
| 3 自分と考えの合わない人のことを、心から受け入れることはできない。            | -.120  | -.136  | .535   | .564   | .026   |
| 1 腹の立つ相手には、いやみとか皮肉を言ってやりたいと思う。                | .087   | -.026  | .103   | .535   | .325   |
| <b>因子 V : 衝動性(<math>\alpha=.758</math>)</b>   |        |        |        |        |        |
| 8 すぐに相手の言葉尻をとらえて、つかかかってやりたくなる。                | -.021  | -.162  | .105   | .202   | .822   |
| 6 批判や忠告をされると、内心恨んでしまう。                        | .014   | -.223  | .230   | .328   | .543   |
| 7 物事がうまくいかないとイライラして、すぐ人にあたる。                  | .090   | -.027  | .299   | .158   | .515   |
| 寄与率   | 13.194 | 11.766 | 11.552 | 9.504  | 8.459  |
| 累積寄与率   | 13.194 | 24.960 | 36.512 | 46.017 | 54.475 |

## a) 分析の過程で削除された項目

- 14 いつも何か刺激を求める。  
 15 周りの人が何と言おうと自分の考えは押し通すほうである。  
 16 平凡に暮らすより、何か変わったことがしたい。  
 17 いろんな世間の活動がしてみたい。  
 21 不愉快なことでも無理に我慢してしまう。  
 25 めちゃくちゃな行動をしたくなる時がある。  
 27 無我夢中で乱暴な運転(車、バイク、自転車など)をしたいと思うことがある。  
 28 自分の髪を引っ張ったり、引き抜いたりしたくなることがある。  
 29 自分の皮膚をかきむしりたくなることがある。

## 第2節 TATにおける攻撃性の得点化について

TATにおける攻撃反応の得点化は、図版3BM・8BM・11・18BM・19を対象とし、Stone（1956）のAggressive Content Scale（以下ACS）を用いて行った。ACSの得点化の基準を以下の表4に示す。

物語を1単位とし、複数のテーマがある場合は最も高いカテゴリでスコアリングした。物語中の攻撃的な行動が、積極的であるよりもむしろ暗に示される場合（攻撃的な行動が将来に位置づけられる、または行動に移さない願望や考えとして存在する場合）、「P（Potential）」をカテゴリの数に加えた。この場合は、通常カテゴリに従って付与される得点を半分にした（例えば3P→1.5点）。図版ごとの反応例とスコアリング例を表5に示す。

調査2の協力者48名中10名（全体の20%）の物語について、筆者と臨床心理学専攻の大学院生1名でスコアリングした。評定者間の一致率を検討するために $\kappa$ 係数を算出したところ、 $\kappa=.81$ であった。よって、評定者間信頼性があるとみなし、残りは筆者のみでスコアリングを行った。

表4 ACSの得点化の基準(Stone,1956)

| カテゴリ番号 | 反応       | 得点 |
|--------|----------|----|
| カテゴリ0  | 攻撃的な反応なし | 0点 |
| カテゴリ1  | 言語的攻撃    | 1点 |
| カテゴリ2  | 身体的攻撃    | 2点 |
| カテゴリ3  | 死の内容     | 3点 |

表5 図版ごとの反応例とスコアリング例

| 図版   | 反応例(カテゴリー→得点)   |
|------|---|
| 3BM  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ・ ・うなだれている。(攻撃的な反応なし→0点)</li> <li>・ ・ ・学校で友達と些細なことで喧嘩してしまって・・・(言語的攻撃→1点)</li> <li>・ ・ ・吐き気がしてきた。(身体的攻撃→2点)</li> <li>・ 自殺を図ってるシーンじゃないかなって思います。(死の内容→3点)</li> </ul>  |
| 8BM  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ・ ・医者になりたい・・・手術をしている場面・・・(攻撃的な反応なし→0点)</li> <li>・ ・ ・ライフルで撃たれる事件が起こった。(身体的攻撃→2点)</li> <li>・ ・ ・死んじゃうかどうなのかっていう最悪の状態です。(死の内容・P:潜在→1.5点)</li> <li>・ ・ ・死体解剖がされたのをたまたまこの少年は見てしまって・・・(死の内容→3点)</li> </ul>                            |
| 11   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ・ ・竜がネズミを乗せる・・・(攻撃的な反応なし→0点)</li> <li>・ 逃げても逃げても動物は追ってきます。(身体的攻撃・P:潜在→1点)</li> <li>・ 彼らはドラゴンに襲われた。(身体的攻撃→2点)</li> <li>・ ライオンを一口で食べてしまいました。(死の内容→3点)</li> </ul>   |
| 18BM | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ・ ・捕まって連行されてしまう。(攻撃的な反応なし→0点)</li> <li>・ 喧嘩ばかりしてしまって(言語的攻撃→1点)</li> <li>・ ぐいぐい引っ張られて自分としては前に行きたいけれども阻止されて・・・(身体的攻撃→2点)</li> <li>・ ・ ・結局この人はそのまま死んでいったっていう話です。(死の内容→3点)</li> </ul>  |
| 19   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ・ ・目の前に目的地の島が見つかった。(攻撃的な反応なし→0点)</li> <li>・ ・ ・怒られたけど、(言語的攻撃→1点)</li> <li>・ なんかこの怪物みたいなのが後ろからきて潰そうとしてて・・・(身体的攻撃・P:潜在→1点)</li> <li>・ 最後はやられちゃう、食べられちゃうと思います。(死の内容・P:潜在→1.5点)</li> <li>・ ・ ・その小人はそれに呑まれたって感じで。(死の内容→3点)</li> </ul> |

### 第3節 男女差の検討

年齢、信頼感尺度・攻撃性尺度の各下位尺度得点、TATのACS得点について、それぞれ男女間でt検定を行った。その結果、年齢のみ男女間で有意な差があり ( $t(97)=11.19$   $p<.01$ )、そのほかの得点に関しては有意な差が

見られなかった。しかし攻撃性に関しては男女差が指摘されているため（西田,1984；松見,2002）、以下の分析は男女別に行うこととした。

#### 第4節 信頼感尺度と攻撃性尺度の関連

調査1の協力者（男性23名、女性76名の合計99名）を分析対象とし、信頼感尺度、攻撃性尺度の各下位尺度の合計を算出し、Pearsonの相関係数を求めた。

その結果、全体では、信頼感尺度の「自分への信頼」と攻撃性尺度の「自責感」( $r=-.369$   $p<.01$ )、「猜疑心」( $r=-.458$   $p<.01$ )、「衝動性」( $r=-.244$   $p<.01$ )に有意な負の相関があり、「積極性」との間に有意な正の相関があった( $r=.446$   $p<.01$ )(表6)。

男性では信頼感尺度の「自分への信頼」と攻撃性尺度の「自責感」( $r=.496$   $p<.05$ )、「怒り反応」( $r=.543$   $p<.01$ )に有意な正の相関が見られた(表7)。

女性では信頼感尺度の「自分への信頼」と攻撃性尺度の「自責感」( $r=-.596$   $p<.01$ )、「猜疑心」( $r=-.561$   $p<.01$ )、「衝動性」( $r=-.319$   $p<.01$ )に有意な負の相関があり、「積極性」との間に有意な正の相関があった( $r=.465$   $p<.01$ )(表8)。

また男女ともに、信頼感尺度の「他人への信頼」と攻撃性尺度との間には有意な相関がなかった。

表6 信頼感尺度と攻撃性尺度の下位尺度間の相関(全体、N=99)

|        | 信頼感    |        | 攻撃性     |        |         |        |        |
|--------|--------|--------|---------|--------|---------|--------|--------|
|        | 他人への信頼 | 自分への信頼 | 自責感     | 積極性    | 猜疑心     | 怒り反応   | 衝動性    |
| 信頼感    |        |        |         |        |         |        |        |
| 他人への信頼 |        | .273** | .139    | .133   | .078    | -.088  | -.004  |
| 自分への信頼 |        |        | -.369** | .446** | -.458** | -.040  | -.244* |
| 攻撃性    |        |        |         |        |         |        |        |
| 自責感    |        |        |         | -.083  | .549**  | .289** | .266** |
| 積極性    |        |        |         |        | -.204*  | .012   | -.230* |
| 猜疑心    |        |        |         |        |         | .396** | .488** |
| 怒り反応   |        |        |         |        |         |        | .442** |
| 衝動性    |        |        |         |        |         |        |        |

\*\*p<.01 \*p<.05

表7 信頼感尺度と攻撃性尺度の下位尺度間の相関(男性、N=23)

|        | 信頼感    |        | 攻撃性   |      |         |        |         |
|--------|--------|--------|-------|------|---------|--------|---------|
|        | 他人への信頼 | 自分への信頼 | 自責感   | 積極性  | 猜疑心     | 怒り反応   | 衝動性     |
| 信頼感    |        |        |       |      |         |        |         |
| 他人への信頼 |        | .361   | .331  | .119 | .110    | -.083  | .002    |
| 自分への信頼 |        |        | .496* | .389 | -.083   | .543** | -.016   |
| 攻撃性    |        |        |       |      |         |        |         |
| 自責感    |        |        |       | .220 | .236    | .500*  | .114    |
| 積極性    |        |        |       |      | -.591** | .078   | -.530** |
| 猜疑心    |        |        |       |      |         | .215   | .625**  |
| 怒り反応   |        |        |       |      |         |        | .237    |
| 衝動性    |        |        |       |      |         |        |         |

\*\*p<.01 \*p<.05

表8 信頼感尺度と攻撃性尺度の下位尺度間の相関(女性、N=76)

|        | 信頼感    |        | 攻撃性     |        |         |        |         |
|--------|--------|--------|---------|--------|---------|--------|---------|
|        | 他人への信頼 | 自分への信頼 | 自責感     | 積極性    | 猜疑心     | 怒り反応   | 衝動性     |
| 信頼感    |        |        |         |        |         |        |         |
| 他人への信頼 |        | .234*  | .102    | .122   | .097    | -.060  | .019    |
| 自分への信頼 |        |        | -.590** | .465** | -.561** | -.182  | -.319** |
| 攻撃性    |        |        |         |        |         |        |         |
| 自責感    |        |        |         | -.169  | .614**  | .243*  | .307**  |
| 積極性    |        |        |         |        | -.067   | .014   | -.092   |
| 猜疑心    |        |        |         |        |         | .419** | .440**  |
| 怒り反応   |        |        |         |        |         |        | .491**  |
| 衝動性    |        |        |         |        |         |        |         |

\*\*p<.01 \*p<.05

## 第5節 TATにおける攻撃性と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度との関連

### ACS得点と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度との関連

TATの結果を含む分析に関しては、個別実施調査の協力者（男性9名、女性39名の合計48名）を分析対象とした。TATにおける攻撃性はACSに



よって、各図版に対して 0～3 点で評定した。ACS 得点の分布は図 1～5 の通りであった。これらの得点分布から、各図版で ACS 得点が 0～1 点を ACS 低群、1.5～3 点を ACS 高群とした。高群と低群の人数の内訳を表 9 に示す。

そして、ACS 低群と ACS 高群の間で、信頼感尺度の下位尺度ならびに攻撃性尺度の下位尺度得点に差があるかどうかを検討するため、男女別に各図版で各下位尺度得点について ACS 低群と ACS 高群で t 検定を行った。

その結果、男性は図版 3 BM と 1 9 において、ACS 高群と ACS 低群の間で「他人への信頼」の得点に有意な差が見られた ( $t(7)=-4.102$   $p<.01$ ) ( $t(7)=-3.286$   $p<.05$ ) (表 10)。すなわち男性は、図版 3 BM と 1 9 の ACS 得点と「他人への信頼」得点に関連があることが示唆された。

女性は図版 1 1 において、ACS 高群と ACS 低群の間で「怒り反応」の得点に有意な差が見られた ( $t(37)=-2.754$   $p<.01$ ) (表 11)。すなわち女性は、図版 1 1 の ACS 得点と「怒り反応」得点に関連があることが示唆された。

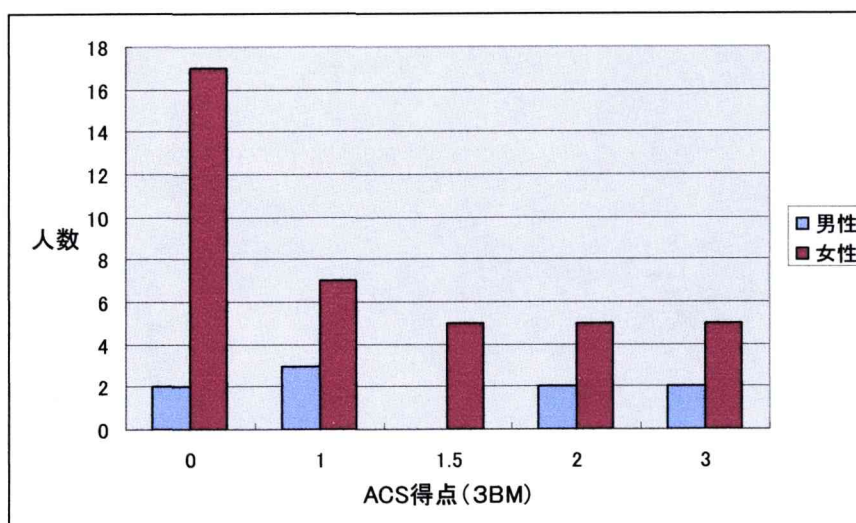


図 1 3 BM の ACS 得点の分布

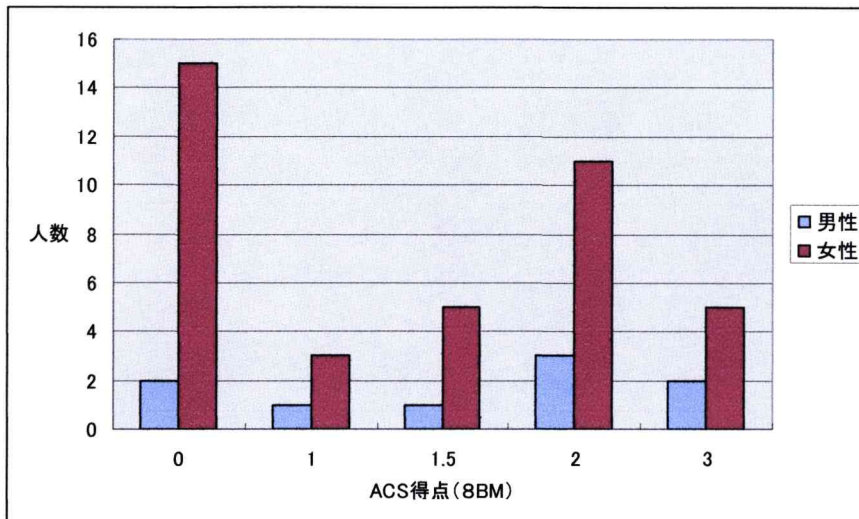


図 2 8 B M の ACS 得点の分布

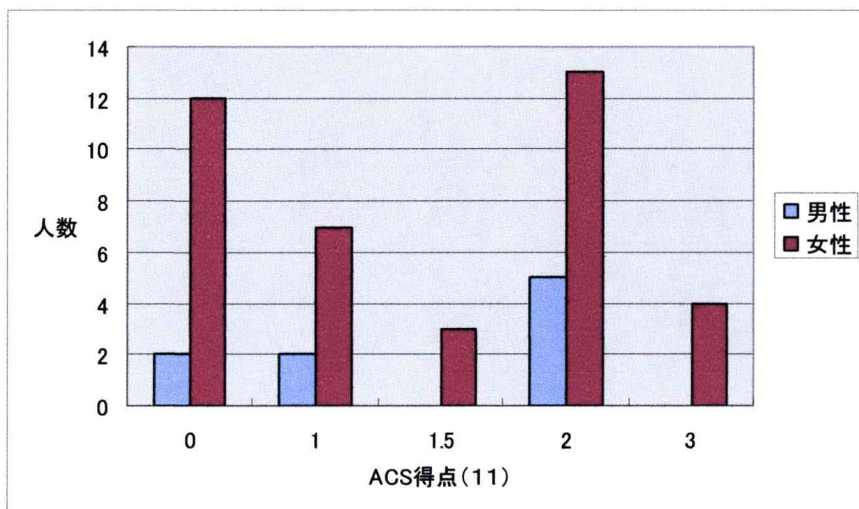


図 3 1 1 の ACS 得点の分布

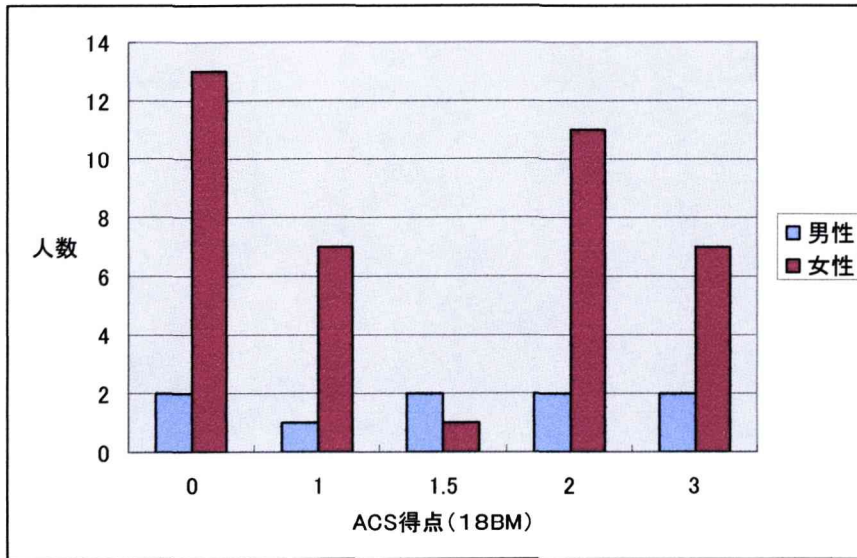


図4 18BMのACS得点の分布

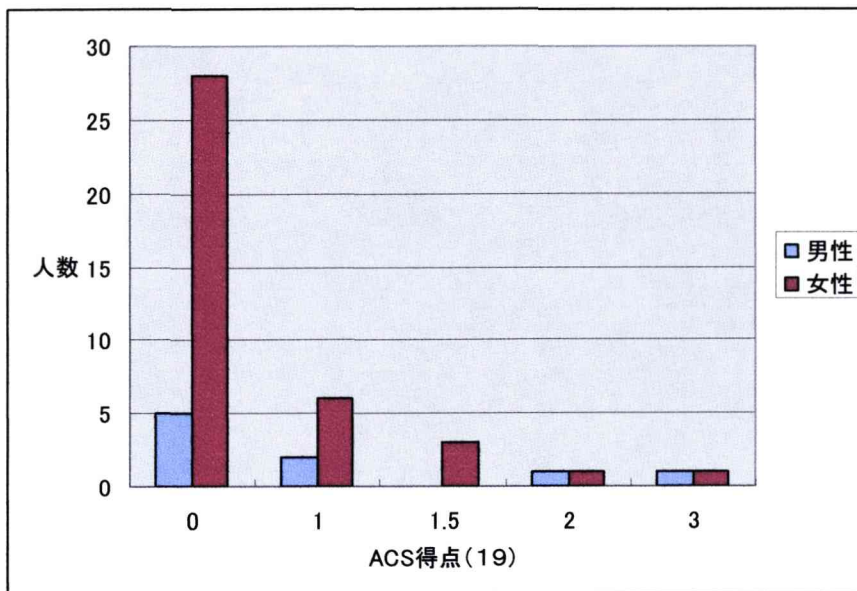


図5 19のACS得点の分布

表9 ACS低群、高群の人数の内訳(男性、N=9 女性、N=39)

|      | 男性    |       | 女性    |       |
|------|-------|-------|-------|-------|
|      | ACS低群 | ACS高群 | ACS低群 | ACS高群 |
| 3BM  | 5     | 4     | 24    | 15    |
| 8BM  | 3     | 6     | 18    | 21    |
| 11   | 4     | 5     | 19    | 20    |
| 18BM | 3     | 6     | 29    | 19    |
| 19   | 7     | 2     | 34    | 5     |

表10 各図版のACS得点で群分けした下位尺度のt検定結果(男性、N=9)

|        | 3BM     | 8BM     | 11    | 18BM   | 19      |
|--------|---------|---------|-------|--------|---------|
| 信頼感    |         |         |       |        |         |
| 他人への信頼 | -4.102* | -.745   | -.855 | -1.590 | -3.286* |
| 自分への信頼 | -.290   | 1.172   | 1.350 | -.054  | .874    |
| 攻撃性    |         |         |       |        |         |
| 自責感    | -.396   | .239    | 1.353 | .385   | .768    |
| 積極性    | 1.1995+ | -.509a) | -.276 | 1.369  | .066    |
| 猜疑心    | -1.359  | 1.313   | 1.359 | .147   | .451    |
| 怒り反応   | .356    | 1.301   | 1.866 | .738   | 1.683   |
| 衝動性    | -.999   | .619    | .425  | -.891  | .584    |

\*p<.05 +p<.1

a) 等分散を仮定しない検定の結果

表11 各図版のACS得点で群分けした下位尺度のt検定結果(女性、N=39)

|        | 3BM    | 8BM    | 11       | 18BM    | 19    |
|--------|--------|--------|----------|---------|-------|
| 信頼感    |        |        |          |         |       |
| 他人への信頼 | -.719  | -.701  | -.232    | -.325   | -.768 |
| 自分への信頼 | -.347  | -1.393 | -.037    | -.059   | 1.038 |
| 攻撃性    |        |        |          |         |       |
| 自責感    | .860a) | 1.158  | .244     | -.720   | -.388 |
| 積極性    | .848   | 1.878+ | -.275    | -1.139  | 1.121 |
| 猜疑心    | .905   | 1.071  | -.131    | .283    | -.591 |
| 怒り反応   | .498   | .347   | -2.754** | .931    | .798  |
| 衝動性    | .604   | 1.783+ | -1.833+  | 1.526a) | -.660 |

\*\*p<.01 \*p<.05 +p<.1

a) 等分散を仮定しない検定の結果

#### 信頼感尺度ならびに攻撃性尺度得点に対する性別と ACS 得点の交互作用

上記の結果から、TAT における攻撃性と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度との関係は、男女間で違いがある可能性が示唆された。よって、有意差が出た部分に対して、従属変数を信頼感尺度ならびに攻撃性尺度の下位尺度得点、独立変数を性別（男性→0、女性→1）と ACS 得点（低群→0、高群→1）とした2要因の分散分析を行った。

まず、図版3BMにおいて、従属変数を「他人への信頼」、独立変数を性別と ACS 得点として分析を行ったところ、「他人への信頼」に対する性別と ACS 得点の交互作用は有意であった ( $F(1,44)=6.925$   $p<.05$ )。単純主効果を

検討したところ、3 BM の ACS 高群において性別の主効果が有意であった ( $F(1,44)=7.874$   $p<.01$ ) (図 6)。つまり、図版 3 BM において、男性では ACS 低群に比べて ACS 高群のほうが「他人への信頼」得点が低い傾向にあったが、女性ではその傾向は見られなかった。

次に、図版 1 9 において、従属変数を「他人への信頼」、独立変数を性別と ACS 得点として分析を行ったところ、「他人への信頼」に対する性別と ACS 得点の交互作用は有意であった ( $F(1,44)=4.754$   $p<.05$ )。単純主効果を検討したところ、ACS 高群において性別の主効果が有意であった ( $F(1,44)=5.956$   $p<.05$ ) (図 7)。つまり、図版 1 9 において、男性では ACS 低群に比べて ACS 高群のほうが「他人への信頼」得点が低い傾向にあったが、女性ではその傾向は見られなかった。

図版 1 1 において、従属変数を「怒り反応」、独立変数を性別と ACS 得点として分析を行ったところ、「怒り反応」に対する性別と ACS 得点の交互作用は有意であった ( $F(1,44)=6.925$   $p<.05$ )。単純主効果を検討したところ、ACS 高群において性別の主効果が有意であった ( $F(1,44)=8.737$   $p<.01$ ) (図 8)。つまり、図版 1 1 において、女性では ACS 低群に比べて ACS 高群のほうが「怒り反応」得点が低い傾向にあったが、男性ではその傾向は見られなかった。

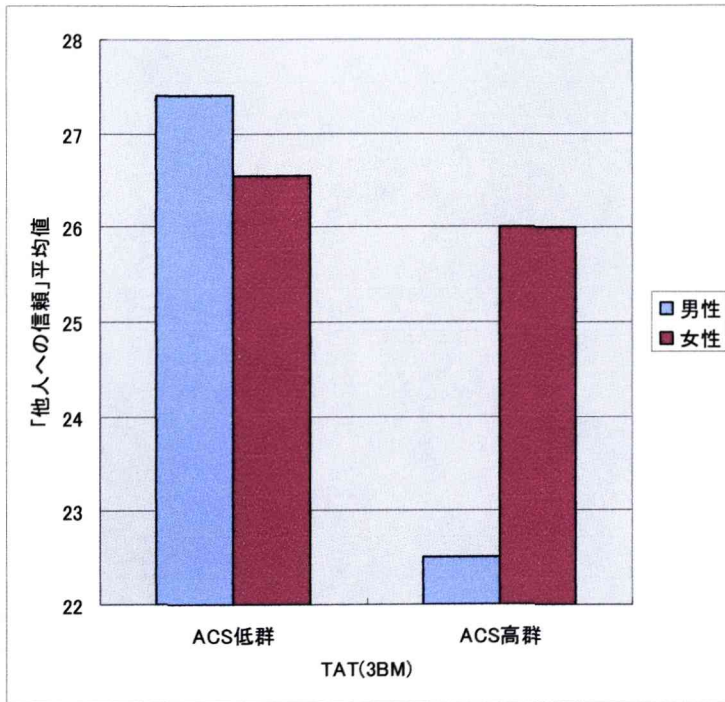


図 6 図版 3 BM における、「他人への信頼」に対する ACS 得点と性別の交互作用

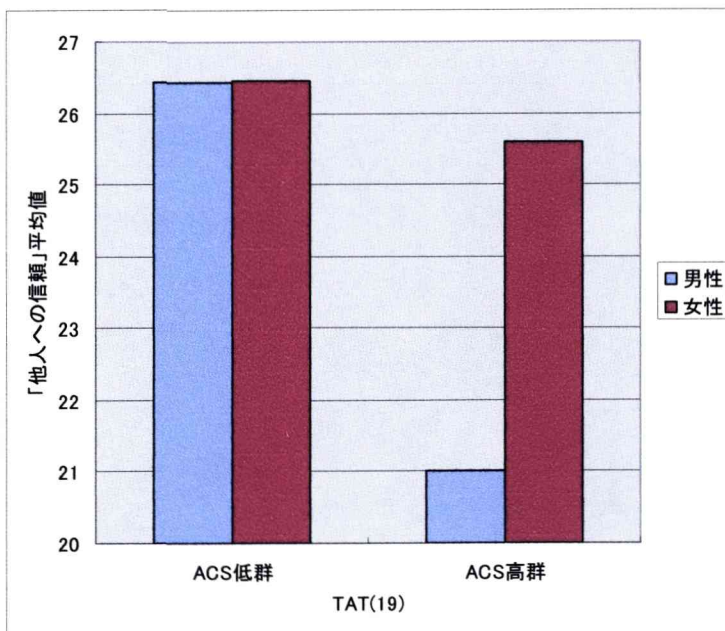


図 7 図版 1 9 における、「他人への信頼」に対する ACS 得点と性別の交互作用



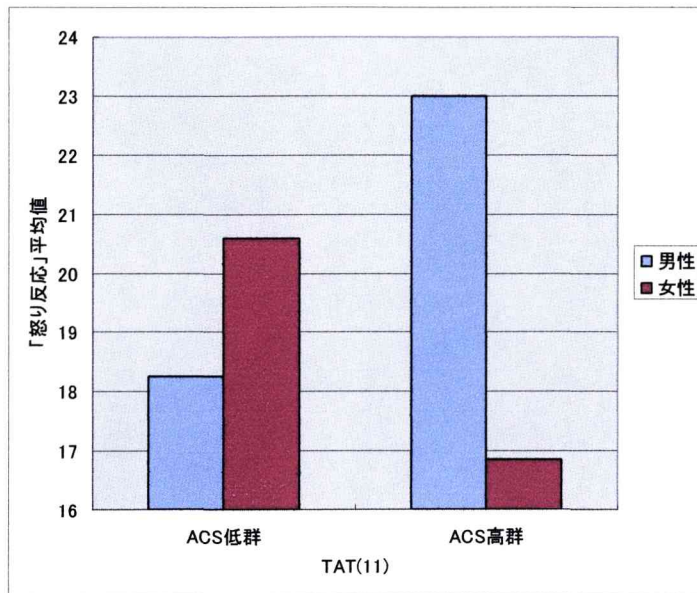


図 8 図版 1 1 における、「怒り反応」に対する ACS 得点と性別の交互作用

## 第 6 節 TAT の内容分析と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度との関連

TAT のテーマと信頼感尺度ならびに攻撃性尺度の関連を検討するため、協力者を各尺度の得点の高低で群分けし、TAT のテーマをカテゴリーで分類して、群間で比較検討した。カテゴリー分類は、鈴木（1997）の反応分類に基づいて行った。

### 群分けの方法

群分けには「攻撃性」得点と「他人への信頼」得点、「自分への信頼」得点を用いた。なお、攻撃性尺度の下位尺度である「積極性」は、攻撃性尺度の他の下位因子と負の相関を示すか、または相関がなかったため、「積極性」を除き、「自責感」「猜疑心」「怒り反応」「衝動性」の合計得点を「攻撃性」得点とした。

協力者を尺度の得点順に並べ替え、得点の上位半分を高群、下位半分を低群とした。

群分けは、「攻撃性」高群／低群×「他人への信頼」高群／低群と、「攻撃性」高群／低群×「自分への信頼」高群／低群の組み合わせで行った。

#### 「攻撃性」、「他人への信頼」での群分け

- ①「攻撃性」高・「他人への信頼」高群
- ②「攻撃性」高・「他人への信頼」低群
- ③「攻撃性」低・「他人への信頼」高群
- ④「攻撃性」低・「他人への信頼」低群

の4群に協力者を分けた。各群の人数の内訳を表12に示す。そして群ごとにTATのテーマをカテゴリーに分類した。協力者48名中10名（全体の20%）のプロトコルについて、筆者と臨床心理学専攻の大学院生1名でスコアリングした結果、一致率は86%であった。よって、ある程度の評定者間信頼性があるとみなし、残りは筆者のみでスコアリングを行った。結果を表13に示す。

まず図版3BMでは、③「攻撃性」低・「他人への信頼」高群は、大切な人との関係の破綻に関するテーマ、つまり大切な人との死別や喧嘩に関するテーマが13人中5人(38%)で、①「攻撃性」高・「他人への信頼」高群が9人中2人(22%)、②「攻撃性」高・「他人への信頼」低群が11人中2人(18%)、④「攻撃性」低・「他人への信頼」低群が12人中2人(17%)であったのに比べて多かった。

また、「攻撃性」低・「他人への信頼」高群では、日々の生活の過酷さ、問題の人の元での苦しみに関するテーマ、つまり対人関係や仕事でのトラブルで、慢性的に人生に疲れているという物語を作った人はいなかった。



次に図版 8 BM では、前景の人物が手術する人と関係づけられている物語、つまり前景の人物が医者になるというようなテーマが、①「攻撃性」高・「他人への信頼」高群では 9 人中 3 人(33%)、②「攻撃性」高・「他人への信頼」低群では 11 人中 2 人 (18%)、③「攻撃性」低・「他人への信頼」高群では 13 人中 6 人 (46%)、④「攻撃性」低・「他人への信頼」低群では 12 人中 5 人 (42%) であり、②の攻撃性が高く他人への信頼が低い群で最も少なく、③の攻撃性が低く他人への信頼が高い群で最も多かった。

次に図版 1 1 では、①「攻撃性」高・「他人への信頼」高群は、物理的障害、災害に関するテーマが 8 人中 4 人 (50%) で、②「攻撃性」高・「他人への信頼」低群が 11 人中 0 人 (0%)、③「攻撃性」低・「他人への信頼」高群が 13 人中 1 人 (8%)、④「攻撃性」低・「他人への信頼」低群が 12 人中 1 人 (8%) であったのに比べて多かった。

次に図版 1 8 BM では、中央の人物が向こう見ずな行為を止められている、逮捕されているというテーマが、①「攻撃性」高・「他人への信頼」高群では 9 人中 1 人(11%)、②「攻撃性」高・「他人への信頼」低群では 11 人中 1 人(9%)、③「攻撃性」低・「他人への信頼」高群では 13 人中 8 人(66%)、④「攻撃性」低・「他人への信頼」低群が 12 人中 3 人 (25%) で、③の攻撃性が低く他人への信頼が高い群で最も多く、攻撃性が高く他人への信頼が低い群で最も少なかった。

また、③「攻撃性」低・「他人への信頼」高群は、人や幽霊に襲われる、悪の道に引き込まれている (求められている) という物語を作った人は 13 人中 0 人(0%)で、①「攻撃性」高・「他人への信頼」高群が 9 人中 8 人(89%)、②「攻撃性」高・「他人への信頼」低群が 11 人中 6 人(55%)、④「攻撃性」低・「他人への信頼」低群が 12 人中 6 人 (50%) であったのに比べて少なかった。

背後の手を介添、奉仕と捉えている物語は、「攻撃性」が低い 2 群にのみ見られた。

最後に図版 19 では、家や船が危機にみまわれるというテーマ（自然の猛威・影響あり）が、①「攻撃性」高・「他人への信頼」高群では 9 人中 3 人（33%）、②「攻撃性」高・「他人への信頼」低群では 11 人中 3 人（27%）、③「攻撃性」低・「他人への信頼」高群では 13 人中 1 人（8%）、④「攻撃性」低・「他人への信頼」低群では 12 人中 2 人（17%）であり、③の攻撃性低く他人への信頼が高い群で最も少なかった。

また、外は自然の厳しさがあるが家の中は安全というテーマ（自然の猛威・影響なし）は、①「攻撃性」高・「他人への信頼」高群では 9 人中 2 人（22%）、②「攻撃性」高・「他人への信頼」低群では 11 人中 1 人（9%）、③「攻撃性」低・「他人への信頼」高群では 13 人中 3 人（23%）、④「攻撃性」低・「他人への信頼」低群では 12 人中 1 人（8%）であり、①③の他人への信頼が高い 2 群で多く、②④の他人への信頼の低い 2 群で少なかった。

表12 「攻撃性」×「他人への信頼」群分けの人数の内訳

|                  | 男性 | 女性 |
|------------------|----|----|
| 「攻撃性」高・「他人への信頼」高 | 1  | 8  |
| 「攻撃性」高・「他人への信頼」低 | 2  | 9  |
| 「攻撃性」低・「他人への信頼」高 | 2  | 11 |
| 「攻撃性」低・「他人への信頼」低 | 2  | 10 |

表13 TATストーリーの比較(「攻撃性」×「他人への信頼」での群分け)

| 反応カテゴリー                     | 攻撃高・他信高 |   | 攻撃高・他信低 |   | 攻撃低・他信高 |   | 攻撃低・他信低 |   |
|-----------------------------|---------|---|---------|---|---------|---|---------|---|
|                             | 男       | 女 | 男       | 女 | 男       | 女 | 男       | 女 |
| <b>3BM</b>                  |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 人物に悲嘆や苦悩を見ている               |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 大切な人との関係の破綻                 | 0       | 2 | 0       | 2 | 0       | 5 | 1       | 1 |
| 自分の行為への後悔や能力のなさへの悲観         | 1       | 1 | 0       | 3 | 0       | 2 | 1       | 2 |
| 日々の生活の過酷さ、問題の人の元での苦しみ       | 0       | 3 | 2       | 3 | 1       | 0 | 0       | 3 |
| 悲嘆や苦悩が原因になっていない身体的変調        |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 身体的疲労                       | 0       | 0 | 0       | 0 | 0       | 1 | 0       | 0 |
| 酔いつぶれ                       | 0       | 1 | 0       | 1 | 0       | 1 | 0       | 2 |
| その他                         | 0       | 1 | 0       | 0 | 1       | 2 | 0       | 2 |
| <b>8BM</b>                  |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 前景の人物が手術、殺害される側の人と関係づけられている |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 手術                          | 0       | 1 | 0       | 2 | 1       | 2 | 0       | 3 |
| 加害行為(人体実験など)、死体解剖           | 0       | 2 | 1       | 2 | 0       | 2 | 0       | 1 |
| 前景の人物が手術、殺害する側の人と関係づけられている  |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 手術                          | 1       | 2 | 0       | 2 | 0       | 6 | 1       | 4 |
| 加害行為(人体実験など)、死体解剖           | 0       | 3 | 1       | 2 | 1       | 1 | 1       | 2 |
| その他                         | 0       | 0 | 0       | 0 | 0       | 0 | 0       | 0 |
| <b>11</b>                   |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 人間が登場する物語                   |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 動物や人の襲撃                     | 0       | 2 | 0       | 4 | 1       | 4 | 1       | 4 |
| 物理的障害、災害                    | 0       | 4 | 0       | 0 | 1       | 0 | 0       | 1 |
| 危機への遭遇が問題にならない(宝探しなど)       | 1       | 0 | 0       | 1 | 0       | 1 | 1       | 0 |
| 動物主体の物語                     |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 動物同士の戦い                     | 0       | 0 | 2       | 0 | 0       | 2 | 0       | 1 |
| 襲撃される、危機に遭遇する               | 0       | 1 | 0       | 2 | 0       | 2 | 0       | 4 |
| その他                         | 0       | 0 | 0       | 1 | 0       | 2 | 0       | 0 |

| 18BM                       | 攻撃高・他信高 |   | 攻撃高・他信低 |   | 攻撃低・他信高 |   | 攻撃低・他信低 |   |
|----------------------------|---------|---|---------|---|---------|---|---------|---|
|                            | 男       | 女 | 男       | 女 | 男       | 女 | 男       | 女 |
| 手を自由を奪うものと捉えている            |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 襲われている                     | 0       | 5 | 1       | 2 | 0       | 0 | 1       | 4 |
| 求められている(引きとめられている)         | 1       | 2 | 0       | 3 | 0       | 0 | 0       | 1 |
| 行為を止められている、逮捕されている         | 0       | 1 | 0       | 1 | 0       | 8 | 1       | 2 |
| 心的体験として自由を奪われている           | 0       | 0 | 0       | 3 | 0       | 1 | 0       | 1 |
| 手を介添、奉仕と捉えている              | 0       | 0 | 0       | 0 | 2       | 1 | 0       | 2 |
| その他                        | 0       | 0 | 1       | 0 | 0       | 1 | 0       | 0 |
| 19                         | 攻撃高・他信高 |   | 攻撃高・他信低 |   | 攻撃低・他信高 |   | 攻撃低・他信低 |   |
|                            | 男       | 女 | 男       | 女 | 男       | 女 | 男       | 女 |
| 家や船を認知している                 |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 自然の猛威、彷徨っている(家、船の中には影響がない) | 1       | 1 | 0       | 1 | 0       | 3 | 0       | 1 |
| 自然の猛威、彷徨っている(家、船の中にも影響がある) | 0       | 3 | 0       | 3 | 0       | 1 | 1       | 1 |
| 魔物などの襲撃                    | 0       | 2 | 2       | 0 | 1       | 2 | 0       | 4 |
| 危機が問題になっていない(楽しい世界)        | 0       | 2 | 0       | 3 | 0       | 1 | 0       | 3 |
| 危機が問題になっていない(不気味、寂しい世界)    | 0       | 0 | 0       | 0 | 0       | 0 | 1       | 0 |
| 家や船を認知していない                |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 楽しい世界                      | 0       | 0 | 0       | 0 | 0       | 1 | 0       | 0 |
| 不気味、寂しい世界                  | 0       | 1 | 0       | 0 | 0       | 2 | 0       | 0 |
| その他                        | 0       | 0 | 0       | 2 | 1       | 1 | 0       | 1 |

「攻撃性」、「自分への信頼」での群分け

- ① 「攻撃性」高群・「自分への信頼」高群
- ② 「攻撃性」高群・「自分への信頼」低群
- ③ 「攻撃性」低群・「自分への信頼」高群
- ④ 「攻撃性」低群・「自分への信頼」低群

の4群に協力者を分けた。各群の人数の内訳を表14に示す。女性において、「攻撃性」の高さと「自分への信頼」の低さには相関があったため、群

分けをすると人数に偏りが見られた。すなわち「攻撃性」高・「自分への信頼」低群と「攻撃性」低・「自分への信頼」高群の合計が 41 人中 32 人 (78%) で、残り 2 群の合計が 41 人中 13 人 (32%) であった。

そして群ごとに TAT のテーマをカテゴリーに分類した。協力者 48 名中 10 名 (全体の 20%) のプロトコルについて、筆者と臨床心理学専攻の大学院生 1 名でスコアリングした結果、一致率は 84% であった。よって、ある程度の評定者間信頼性があるとみなし、残りは筆者のみでスコアリングを行った。結果を表 15 に示す。

まず図版 3 BM では、日々の生活の過酷さ、問題の人の元での苦しみというテーマ、つまり対人関係や仕事でのストレスによって慢性的に人生に疲れているというような物語を作った人が、①「攻撃性」高・「自分への信頼」高群では 7 人中 2 人 (29%)、②「攻撃性」高・「自分への信頼」低群では 16 人中 7 人 (44%)、③「攻撃性」低・「自分への信頼」高群では 16 人中 2 人 (13%)、④「攻撃性」低・「自分への信頼」低群では 6 人中 2 人 (33%) であり、②の攻撃性が高く自分への信頼が低い群で最も多く、③の攻撃性が低く自分への信頼が高い群で最も少なかった。

また、自分の行為への後悔や能力のなさに対する悲嘆に関するテーマが、①「攻撃性」高・「自分への信頼」高群では 7 人中 2 人 (29%)、②「攻撃性」高・「自分への信頼」低群では 16 人中 2 人 (13%)、③「攻撃性」低・「自分への信頼」高群では 16 人中 4 人 (26%)、④「攻撃性」低・「自分への信頼」低群では 6 人中 1 人 (17%) であり、①③の自分への信頼が高い 2 群で多く、②④の自分への信頼が低い 2 群で少なかった。

次に図版 8 BM では、女性は群間でテーマに目立った差は見られなかった。男性では、「自分への信頼」が低い 2 群の人は、全員 (4 人中 4 人) 加害行為や死体解剖の場面という物語を作った。「自分への信頼」が低い群でも「攻

「攻撃性」が高い群の人は、死体解剖や人体実験をされる側の人と関係づけられている物語を作り（2人中2人）、「攻撃性」が低い群の人は死体解剖をする側の人と関係づけられている物語を作った（2人中2人）。

次に図版11では、人間と動物が戦っている、襲われているというテーマが、①「攻撃性」高・「自分への信頼」高群では7人中3人(43%)、②「攻撃性」高・「自分への信頼」低群では16人中5人(31%)、③「攻撃性」低・「自分への信頼」高群では16人中7人(44%)、④「攻撃性」低・「自分への信頼」低群では6人中1人(17%)であり、①③の自分への信頼が高い2群で多く、②④の自分への信頼が高い2群で少なかった。

次に図版18BMでは、中央の人物が向こう見ずな行為を止められている、逮捕されているというテーマが、①「攻撃性」高・「自分への信頼」高群では7人中1人(14%)、②「攻撃性」高・「自分への信頼」低群では16人中1人(6%)、③「攻撃性」低・「自分への信頼」高群では16人中9人(56%)、④「攻撃性」低・「自分への信頼」低群では6人中2人(33%)であり、③の攻撃性が低く自分への信頼が高い群で最も多く、②の攻撃性が高く、自分への信頼が低い群で最も少なかった。

一方、人や幽霊に襲われている、悪の道に引き込まれている（求められている）、というテーマは、①「攻撃性」高・「自分への信頼」高群では7人中4人(57%)、②「攻撃性」高・「自分への信頼」低群では16人中10人(63%)、③「攻撃性」低・「自分への信頼」高群では16人中3人(19%)、④「攻撃性」低・「自分への信頼」低群では6人中1人(17%)であり、①②の攻撃性が高い群で多く、③④の攻撃性が低い群で少なかった。

また、心的体験として自由を奪われているというテーマは、①「攻撃性」高・「自分への信頼」高群では7人中1人(14%)、②「攻撃性」高・「自分への信頼」低群では16人中4人(25%)、③「攻撃性」低・「自分への信頼」

高群では 16 人中 1 人（6%）、④「攻撃性」低・「自分への信頼」低群では 6 人中 0 人（0%）であり、攻撃性が高く自分への信頼が低い群で最も多く、攻撃性が低い 2 群で少なかった。

背後の手を介添、奉仕と捉えている物語は、「攻撃性」が低い 2 群にのみ見られた。

最後に図版 19 では、外は自然の厳しさがあるが家の中は安全というテーマ（自然の猛威・影響なし）が①「攻撃性」高・「自分への信頼」高群では 7 人中 2 人(29%)、②「攻撃性」高・「自分への信頼」低群では 16 人中 1 人（6%）、③「攻撃性」低・「自分への信頼」高群では 16 人中 4 人（25%）、④「攻撃性」低・「自分への信頼」低群では 6 人中 0 人（0%）であり、①③の自分への信頼が高い 2 群で多く、②④の自分への信頼が低い 2 群で少なかった。

また、危機が問題になっていない、おとぎ話のようなメルヘンな物語は、①「攻撃性」高・「自分への信頼」高群では 7 人中 1 人(14%)、②「攻撃性」高・「自分への信頼」低群では 16 人中 3 人（19%）、③「攻撃性」低・「自分への信頼」高群では 16 人中 1 人（6%）、④「攻撃性」低・「自分への信頼」低群では 6 人中 3 人（50%）であり、④の攻撃性も自分への信頼も低い群が他の 3 群に比べて多かった。

表14 「攻撃性」×「自分への信頼」群分けの人数の内訳

|                  | 男性 | 女性 |
|------------------|----|----|
| 「攻撃性」高・「自分への信頼」高 | 2  | 5  |
| 「攻撃性」高・「自分への信頼」低 | 2  | 14 |
| 「攻撃性」低・「自分への信頼」高 | 2  | 14 |
| 「攻撃性」低・「自分への信頼」低 | 2  | 4  |

表15 TATストーリーの比較(「攻撃性」×「自分への信頼」での群分け)

| 反応カテゴリー                     | 攻撃高・自信高 |   | 攻撃高・自信低 |   | 攻撃低・自信高 |   | 攻撃低・自信低 |   |
|-----------------------------|---------|---|---------|---|---------|---|---------|---|
|                             | 男       | 女 | 男       | 女 | 男       | 女 | 男       | 女 |
| <b>3BM</b>                  |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 人物に悲嘆や苦悩を見ている               |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 大切な人との関係の破綻                 | 1       | 0 | 0       | 5 | 1       | 5 | 0       | 0 |
| 自分の行為への後悔や能力のなさへの悲観         | 1       | 1 | 0       | 2 | 0       | 4 | 1       | 0 |
| 日々の生活の過酷さ、問題の人の元での苦しみ       | 0       | 2 | 2       | 5 | 1       | 1 | 0       | 2 |
| 悲嘆や苦悩が原因になっていない身体的変調        |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 身体的疲労                       | 0       | 0 | 0       | 0 | 0       | 1 | 0       | 0 |
| 酔いつぶれ                       | 0       | 0 | 0       | 2 | 0       | 1 | 0       | 2 |
| その他                         | 0       | 1 | 0       | 0 | 0       | 2 | 1       | 0 |
| <b>8BM</b>                  |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 前景の人物が手術、殺害される側の人と関係づけられている |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 手術                          | 0       | 0 | 0       | 4 | 1       | 3 | 0       | 1 |
| 加害行為(人体実験など)、死体解剖           | 0       | 1 | 2       | 3 | 0       | 2 | 0       | 0 |
| 前景の人物が手術、殺害する側の人と関係づけられている  |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 手術                          | 1       | 1 | 0       | 5 | 1       | 5 | 0       | 3 |
| 加害行為(人体実験など)、死体解剖           | 1       | 2 | 0       | 2 | 0       | 3 | 2       | 0 |
| その他                         | 0       | 0 | 0       | 0 | 0       | 0 | 0       | 0 |
| <b>11</b>                   |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 人間が登場する物語                   |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 動物や人の襲撃                     | 1       | 2 | 0       | 5 | 0       | 7 | 1       | 0 |
| 物理的障害、災害                    | 0       | 0 | 0       | 3 | 1       | 1 | 0       | 1 |
| 危機への遭遇が問題にならない(宝探しなど)       | 0       | 0 | 0       | 0 | 0       | 1 | 1       | 0 |
| 動物主体の物語                     |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 動物同士の戦い                     | 0       | 0 | 2       | 1 | 0       | 3 | 0       | 0 |
| 襲撃される、危機に遭遇する               | 0       | 2 | 0       | 3 | 0       | 1 | 0       | 2 |
| その他                         | 0       | 0 | 0       | 1 | 0       | 1 | 0       | 1 |



| 18BM                       | 攻撃高・自信高 |   | 攻撃高・自信低 |   | 攻撃低・自信高 |   | 攻撃低・自信低 |   |
|----------------------------|---------|---|---------|---|---------|---|---------|---|
|                            | 男       | 女 | 男       | 女 | 男       | 女 | 男       | 女 |
| 手を自由を奪うものと捉えている            |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 襲われている                     | 1       | 1 | 1       | 6 | 1       | 1 | 0       | 1 |
| 求められている(引きとめられている)         | 1       | 1 | 0       | 3 | 0       | 1 | 0       | 0 |
| 行為を止められている、逮捕されている         | 0       | 1 | 0       | 1 | 0       | 9 | 1       | 1 |
| 心的体験として自由を奪われている           | 0       | 1 | 0       | 4 | 0       | 1 | 0       | 0 |
| 手を介添、奉仕と捉えている              | 0       | 0 | 0       | 0 | 1       | 1 | 1       | 2 |
| その他                        | 0       | 0 | 1       | 0 | 0       | 1 | 0       | 0 |
| 19                         | 攻撃高・自信高 |   | 攻撃高・自信低 |   | 攻撃低・自信高 |   | 攻撃低・自信低 |   |
|                            | 男       | 女 | 男       | 女 | 男       | 女 | 男       | 女 |
| 家や船を認知している                 |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 自然の猛威、彷徨っている(家、船の中には影響がない) | 1       | 1 | 0       | 1 | 0       | 4 | 0       | 0 |
| 自然の猛威、彷徨っている(家、船の中にも影響がある) | 0       | 1 | 0       | 3 | 0       | 2 | 0       | 1 |
| 魔物などの襲撃                    | 1       | 1 | 2       | 3 | 0       | 3 | 1       | 1 |
| 危機が問題になっていない(楽しい世界)        | 0       | 1 | 0       | 3 | 0       | 1 | 0       | 3 |
| 危機が問題になっていない(不気味、寂しい世界)    | 0       | 0 | 0       | 0 | 1       | 0 | 0       | 0 |
| 家や船を認知していない                |         |   |         |   |         |   |         |   |
| 楽しい世界                      | 0       | 0 | 0       | 1 | 0       | 0 | 0       | 0 |
| 不気味、寂しい世界                  | 0       | 0 | 0       | 1 | 0       | 2 | 0       | 0 |
| その他                        | 0       | 0 | 0       | 2 | 1       | 2 | 0       | 0 |

## 第4章 考察

### 第1節 信頼感尺度ならびに攻撃性尺度の検討の考察

信頼感尺度（天貝,1997）と攻撃性尺度（安立,2001）について、先行研究に基づき確認的因子分析を行った結果、どちらの尺度においても先行研究とは異なった因子構造が認められた。また、多くの項目が削除された。

まず、天貝（1997）の信頼感尺度で「不信」「他人への信頼」「自分への信頼」の3因子構造だったのに対し、本研究では「他人への信頼」「自分への信頼」の2因子構造になった。削除された項目には、項目10「人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう」というような、他者からの裏切りに関する項目が複数含まれた。また、項目5「私の地位や立場が変われば、私自身も今とはまったく違う人間になるだろう」というような自我同一性拡散に関する項目も複数含まれた。

次に、攻撃性尺度では、項目25「めちゃくちゃな行動をしたくなるときがある」などの、安立（2001）の尺度における「自己破壊行動」の項目が複数削除され、「自己破壊行動」にあたる因子がなくなった。また、「対象攻撃行動」にあたる因子が、項目2「腹の立つことをされると、後々まで根に持つほうである」というような、ある対象の行為に対する怒りの反応に関する項目を含む因子と、項目8「すぐに相手の言葉尻をとらえて、つかかかってやりたくなる」というような、衝動性に関する項目を含む因子に分かれ、それぞれ「怒り反応」「衝動性」と命名された。

清瀧(2008)は調査研究（対人信頼感の測定には信頼感尺度（天貝,1999）を用い、攻撃行動の測定には日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（安藤ら,1999）の「身体的攻撃」「言語的攻撃」を用い、自傷行為の測定には自傷

行為経験について 5 件法で回答を求めている) の結果、「不信」が自傷行為に正の影響を与えることを示しているが、このことは上記の確認的因子分析の結果と関係していると考えられる。つまり、清瀧が関連を指摘する「不信」と自傷行為、本研究の項目で言えば他者からの裏切りに関する項目や「自己破壊行動」の項目が、因子としてまとまりをなさなかったということは、本研究における協力者は、自己破壊衝動や自己破壊衝動に関連するような不信感を、意識レベルにおいて自覚していない傾向にあると言えるのではないだろうか。本研究における協力者は全員 1 校の教育大学の学生であり、先行研究に比べ人数が少なく、男女比も異なるため、データにある種の偏りがある可能性は十分にあると考えられる。

## 第 2 節 信頼感尺度と攻撃性尺度の関連の考察

信頼感尺度と攻撃性尺度の相関を分析した結果、男性では信頼感尺度の「自分への信頼」と攻撃性尺度の「自責感」、「怒り反応」に有意な正の相関が見られ、女性では「自分への信頼」と「自責感」、「猜疑心」、「衝動性」に有意な負の相関があり、「積極性」との間に有意な正の相関があった。

「自分への信頼」と「自責感」の関係は、男性と女性で逆の関係を示した。つまり、男性では「自分への信頼」が高ければ「自責感」も高いのに対し、女性では「自分への信頼」が低ければ「自責感」は高いという結果になった。

また、男性では「自分への信頼」が高ければ「怒り反応」も高いのに対し、女性では「自分への信頼」が低ければ「猜疑心」や「衝動性」は高いという結果になった。

この結果より、信頼感と攻撃性の関連は、性別によって差があることが示唆された。つまり、男性は自分への信頼が高いほど自分を責めたり、他者に

腹を立てたりする傾向があるが、女性は自分への信頼が低いほど自分を責めたり、他者を疑ったり、衝動的になる傾向にあることが示された。

信頼感尺度の「他人への信頼」と攻撃性尺度の関連に関しては、男女ともに有意な相関がなかった。よって、他人への信頼と攻撃性は、男女ともに意識レベルでは関連がないことが示唆された。先行研究（葛西・中本,2008；清瀧,2008）においては「他人への信頼」や「不信」と「敵意」「身体的攻撃」「言語的攻撃」に関連があることが示唆されているので、本章の第1節で述べたように、本研究の協力者のデータには、ある種の偏りがある可能性が考えられる。

攻撃性尺度の下位尺度である「積極性」は、男性では攻撃性の他の下位尺度（「猜疑心」と「衝動性」）と負の相関があるか、または相関がなかった。女性では他の下位尺度と相関がなかった。積極性を攻撃性と捉えるかどうかは、議論の分かれるところである（高橋,1985）。例えば Freud（1929）は攻撃本能の破壊性のみを認め、建設的な意味を認めなかった。一方 Storr（1973）は人間として生きるために必要な独立心、自尊心、目標達成欲なども攻撃本能の表現であると主張した。安立（2001）の尺度における「積極的行動」の項目は Storr などの考えを元にしたものであると思われる。積極性を広義の攻撃性に含めるかという問題とは別として、本研究においては、積極性は攻撃性尺度の他の下位尺度とは質の違うものである可能性が示唆された。

### 第3節 TATにおける攻撃性と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度の関連の考察

TATにおける攻撃性と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度との関連を検討するために、TATにおける攻撃性をACSによって得点化し、TATにおける攻

撃性の得点が高い群（ACS 高群）と低い群（ACS 低群）に分けた。そして、群間で各下位尺度の得点に差があるかを、各図版において検討した。

その結果、男性は図版 3 BM と 1 9 において、ACS 高群と ACS 低群の間で「他人への信頼」の得点に有意な差が見られ、女性は図版 1 1 において、「怒り反応」の得点に有意な差が見られた。したがって、男性では図版 3 BM と 1 9 における攻撃性と質問紙における「他人への信頼」に関連があり、女性では図版 1 1 における攻撃性と質問紙における「怒り反応」に関連があるということが示された。

以上の結果から、TAT における攻撃性と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度との関連は性別によって差があることが示唆されたため、上記の分析で有意差が出た部分に対して、従属変数を信頼感尺度ならびに攻撃性尺度の下位尺度得点、独立変数を性別と ACS 得点とした 2 要因の分散分析を行った。その結果、3 つすべての分析で下位尺度得点に対する性別と ACS 得点の交互作用が有意であった。

つまり、男性では図版 3 BM と 1 9 で攻撃的な物語を作る人ほど質問紙では他人への信頼が低い傾向が見られたのに対し、女性ではその傾向は見られなかった。また、女性では図版 1 1 で攻撃的な物語を作る人ほど質問紙では他者に腹を立てにくい傾向が見られたのに対し、男性では有意ではないものの、ほぼ逆の傾向が見られた（図 8 参照）。

男女ともに「他人への信頼」と質問紙における攻撃性には関連がなかったが、男性では「他人への信頼」の低さと TAT（3 BM と 1 9）における攻撃性の高さに関連があった。

たとえば、図版 3 BM において「他人への信頼」得点が低い人（下位 2 名）は、「この場面より以前に人生に疲れるようなことが、仕事やら恋愛やらでそんなことがあった風に思えて、この場面ではちょっとこの足元にあるのが

刃物に見えるんですけど、ちょっと自殺を図ってるシーンじゃないかなって思います。(中略)でも刃物を持ってなくて地面においてあるから、自殺を図って思いとどまったシーンじゃないかなって思うんですけど、この姿勢見てもこの女の人は自分で立ち直るっていうことは僕はすごい考えにくいんですけど(中略)きっと本人の中でも希望を抱いてるものがあるって、この人はいつか誰かの助けを借りて、更生していく姿に見えます(15番、男性)」「この人は今ここにある刃物のようなもので自分の体を傷つけてちょっと横たわっている状態なんですけれども、その原因は会社の上司にセクハラまがいなことを受けて、精神的に悩んでいたからなんですけれども、結局この人はのちのち怪我が回復した後に病院の方に行ったりして、家族の支えもあって無事に回復というか、元の生活に戻ることができましたという話です(37番、男性)」というような物語を作った。これらの物語には、何か外的な出来事が原因で自傷、自殺企図をし、誰かに助けられて回復するというテーマがある。

一方、「他人への信頼」得点が高い人(上位2名)は、図版3BMにおいて「この人は今日朝はとっても機嫌がよかったんですね。むっちゃ機嫌がよくって何でもやってやろうっていう気持ちだったんですけど、なんか仕事に出かけて、仕事で大失敗をして、今家に帰ってもものすごくうなだれてるんですね。なんであんなに機嫌よかったのにな、なんでこんなうまいこといかないんだろうな、私だめだわ、すごい気分屋な人なんでしょうね。たぶん明日の朝になったら元気になってると思います(48番、男性)」「この女の人は夫がいます。毎日のように意見の食い違いが発生し、日々つらい思いをしています。(中略)それが数年続き、この先夫婦として生きていくことができるのかと思うと、人生が真っ暗に思え、とうとう気丈にふるまうこともできず、ただソファにもたれかかり、この虚無感を味わうだけの生活になってし

まった(35番、男性)」というような物語を作った。これらの物語では「他人への信頼」が低い2人の物語に見られたテーマは見られず、悲嘆の原因は自分または自分と相手とされていた。

また、図版19において、「他人への信頼」得点が低い人(下位2名)は、「この男の子はずっと敵と戦ってて、それでこのシーンでは、上から波みたいなのが襲ってきてる風に見えるんですけど、それに逃げながら戦ってるシーンに見えます(15番、男性)」「最近ちょっと漁師さんが船を出すとなぜか沈没する奇妙な事件が起こっていて、その犯人って言うのはここに写っている目がでかくて黒い陰のある物体なんですけども、この物体っていうのは依然ここで殺された人物で、この海に呪いがあるので(中略)海に出てくる人たちを呪い殺そうとしている(37番、男性)」というような物語を作った。これらの物語からは、何か被害を受けて攻撃する、または呪いとして被害が連鎖するという復讐のテーマが読み取れる。つまり、他者への不信と攻撃性が関連した物語が語られている。

一方、「他人への信頼」得点が高い人(上位2名)は、図版19において「これは冬籠りをしている家ですね。この家の中には家族が住んでいて、今ものすごい雪が積もっている状況で(中略)でもこの冬が来る前にいろいろ食料を貯めたり、燃料も貯めていたから、家族もいるから、この窓は少しあったかそうに僕は見えるんです。すごく外は寒くて厳しいけど中はあったかくて落ち着いてる(48番、男性)」「これは風景画です。(中略)この地域に住む人々は観光資源に頼りきった地域産業を今まで起こし、生活を営んできました。(中略)このようなポストカードにして自分たちの地域の美しさ、それだけに頼らない自分たちの文化を資源とし、今まさに環境観光都市として復活していく道をたどっています(35番、男性)」というような物語を作った。これらは「他人への信頼」が低い人の物語に比べ、攻撃のテーマがあまり表

れていない物語であると言える。安香(1997)は図版19について、絵全体を雪景色の中の家で窓から見える内部は暖かく居心地よさそうと見るか、荒れた川もしくは海で船が漂っていると見るかを解釈のポイントとして挙げ、前者は安定した人、後者は不安定な人としている。本研究においても、「他人への信頼」が低い人が荒れた海に関する物語を、「他人への信頼」が高い人が雪景色の中の家や風景画に関する物語を作り、安香の指摘する傾向と一致するものであった。また、「他人への信頼」が低い人の荒れた海に関する物語では、海での戦いや呪いというテーマが語られていて、攻撃性の高いものであった。

女性では「怒り反応」の低さと TAT (11) における攻撃性の高さに関連があった。たとえば、女性で「怒り反応」得点が低い人(下位5名のうちの3名)は、図版11において「魔女の本当の姿は城の地下のドラゴンで、魔法をかけたり火を噴いたりしている。(中略)これから2人は一生懸命戦って、お姉ちゃんをかばおうとして、弟が魔女が噴いた火を浴びてしまった。すごく負傷してしまったんだけど、力を合わせて2人で呪文を唱えて魔女を倒して2人はまたもとの世界に戻れた(27番、女性)」「ずっと探検してて、宝物を探しに探検してて、このゴールというか宝物のある場所に着いたときに、上から竜がきて、みんな驚いてるのがこの絵だと思います。その後竜と戦って、宝物を手に入れてみんなで町に帰ると思います(21番、女性)」

「ある日、悪い怪物がやってきて町の人を苦しめるようになりました。牛は勇敢に戦い、怪獣をやっつけ幸せに暮らしました(43番、女性)」というような物語を作った。3つの物語には、敵を倒して危機状態が解決するというテーマが見られた。

一方、女性で「怒り反応」得点が高い人(上位3名)は、図版11において「この主人公は・・・なんか大切な人かなんかを誰かにさらわれて、それ



でこの遺跡に来たんじゃないかなと思います。(中略) ここに来るまでにずいぶん大変な思いをして、疲れてる風に見えます。それで首の長い竜みたいなのは、敵だけど、この遺跡まだまだ写真からはみ出るくらい上があって、なんかラスボスには程遠いみたいな感じに見えます。その大切な人を取り戻せたかどうかというのはちょっと予想できないです(15番、女性)」「深い森の中で、3人グループぐらいの友達らがそこには幻のドラゴンが出るらしいみたいな話を聞いて、見に行こうぜみたいな話になって(中略)進んでいって、ガラガラガラって崖から落ちちゃって、不思議生物の鳥さんが落ちてたところを助けてくれて、溪谷の奥の奥の下のほうに降りれて、そしたらそこにドラゴンが出てきて、あまりにドラゴンがきれいで神秘的過ぎて、持って帰るとかそういうのは全然思いつかず、そのままボーっと眺めてしまって、そのまま竜はどっかに飛び去ってしまって、あ、行っちゃったみたいな感じで(18番、女性)」「誰かの夢の中で、その人自体がこのライオンみたいなので、何かにおびえているような感情もあって、最近のことが夢に出てきて、そのことがその物事がはっきり出てくるんじゃないくて、自然のもので地震とか雪崩とか土砂崩れみたいなんで、その人の感情が表されて、最近の怖かったこととかが自分に襲ってくるような、覆いかぶさるみたいな。自分はずいぶん困ってて、どうしたらいいかわからなくて、逃げ道もなくて、危険な崖のすれすれのところに立ってる状態で、どうしようかみたいな。危険な状態にいるのがたぶんこの人で、頭の中でそれを考えてしまっているんだと思います(16番、女性)」というような物語を作った。これらの物語は「怒り反応」が低かった人の物語に比べ、戦って敵を倒すというようなテーマがはっきりと語られない傾向にあった。また、危機や疑問は解決されないという傾向が見られた。

安香(1997)は図版11では第一に攻撃が問題となることが多いと指摘

し、坪内（1984）は動物同士や動物と人間の戦いのテーマを一般的なテーマとして挙げている。鈴木（1997）は攻撃性において問題にされるべきは、それに対する受容性、意識性、統制であると言い、図版 1・3BM・4・8BM・9BM・11・13MF・15・18GF で攻撃的行為がテーマになっており、かつ語り手が攻撃される側の人物に身を置いている場合、また図版 1 1 で竜をおとなしく襲わない竜とする場合、自らの攻撃衝動に気づいているとは言い切れないと述べている。このことは、「怒り反応」が高かった人の物語で戦いのテーマがはっきりと語られなかったことと関連があるのではないかと考えられる。また、「衝動性」と図版 1 1 の ACS 得点にも有意傾向で負の関連があったことから（表 10 参照）、「怒り反応」や「衝動性」が高いことと図版 1 1 で戦いのテーマがはっきりと語られないことは関連があると考えられる。

また図版 1 1 において、TAT における攻撃反応と質問紙における「怒り反応」との間に男女間で逆の関連が見られたことは、一般的に女性のほうが攻撃性に対する抑制が強いことが期待されることからすると、大淵（1977）の「攻撃の抑止の強さは行動と TAT の攻撃表現を相補的にさせるという葛藤モデルは有力である」の示唆に当てはまるかもしれない。

#### 第 4 節 TAT の内容分析と信頼感尺度ならびに攻撃性尺度との関連の考察

##### 「攻撃性」、「他人への信頼」での群分け

尺度得点で群分けした 4 群間において、TAT のテーマに最も顕著に差が見られたのは図版 1 8 BM であった。

図版 1 8 BM では、「攻撃性」が低く「他人への信頼」が高い群では、「なんかおじさんが、悪いことをして逃げてたけど、潜伏先で警察に見つかり、

捕まって連行されてしまう。それで刑務所に入れられる(女性、17番)」のような、中央の人物が悪いことをして逮捕されているという物語や、「今日は一日働いて、友達とお酒を飲みに行っているいろいろしゃべって、(中略)もう1件行こかみたいに言ってるけど無理そうだから、友達に止められてると思っています。で、この人はフラフラなので、帰れないから友達が家まで送って帰ってあげて、寝て、友達も一緒に家に泊まったと思います(22番、女性)」のような、向こう見ずな行為をとめられているというテーマ、つまり人物が能動的に動こうとしていて、それを周りの人に止められているというテーマが多い傾向にあった(66%)。「攻撃性」が高く「他人への信頼」が低い群では、少ない傾向にあった(9%)。

「攻撃性」が高い、もしくは「他人への信頼が」低い3群では、「この男の人は、この人もまたエリートで、すごく人柄もよく、正義感もあって、まじめで、がんばり屋さんのところのあるんですけど、今ここで掴まれてるのが悪魔の手で、悪い道に引きずり込もうと誘いの手でこっちにこい、こっちにこいと言っているところです。(中略)この人は引きずりこまれないようにとがんばるんですが、結局はちょっとしたことから悪の道に行ってしまうってという風な話になりました(11番、女性)」のような、悪い世界に引き込まれようとしているというテーマや、「この人は会社帰りの夜でトンネル歩いてたら、急に後ろからがっとならされて、何だと思ってたら、怪奇現象みたいな感じで殺されてしまうところで、そのトンネルでこの人が昔車で運転してたときに、ひき逃げしてしまってその女の人の霊がトンネルにあって、この人が夜一人で歩いてるところを狙ってがっとならされて、亡くなってしまった。で、次はこのトンネルで女の人の霊は成仏されて、次はここで殺された男の人の霊がまたいるから、次来る人を誰でもこの人は無差別に同じ目にあわせてやろうと、ずっとそこにまたいる、ちょっと怖い話(39番、女性)」のよ

うな、幽霊に襲われているというテーマ、つまり人物が受動的に被害を被る、復讐によって被害が連鎖するというテーマが多い傾向にあった(50～89%)。「攻撃性」が低く「他人への信頼」が高い群では、そのようなテーマは見られなかった(0%)。

安香(1997)は、図版 1 8 BM では自分の周囲を支持的と見ているか脅威的とみているかの識別ができると述べている。鈴木(1997)は、「襲われる」という反応は背後の闇に不気味さを感じ取られていると言え、語り手は強い攻撃衝動のために周囲に対しても警戒的になっているのではないかと述べている。また、向こう見ずな行動を止められる、逮捕されるとするものと、暴行、強姦、拉致にあっているとするものを対比して、前者は法の枠内のことであるのに対し、後者はそうではなく生々しさがあると言い、語り手の攻撃性の社会化の水準の高さ、低さを反映しているのではないかと述べている。これらの知見と本研究の結果を照らし合わせると、「攻撃性」が高いことや「他人への信頼」が低いことは、周囲を脅威的とみなすこと(不信)による攻撃というテーマと関連があるのではないかと考えられる。

また、「刑事でこの人は。いろんな事件があつて、ある事件のキャプテンになって、でもぜんぜん謎も解けなくて、犯人も見つからなくて、(中略)後輩たちががんばってください先輩って言って、ありがとうーって肩揉みしてもらって、(中略)次のプランを考えていく。なんとか解決できるようにしていくでしょう(7番、女性)」のような、手を介添、奉仕と捉えている物語は、「攻撃性」が低い2群にのみ見られた。

図版 3BM では、「この人はこの場面の前に大切な人を亡くしてしまって、この場面で悲しんでるっていう状況で、その後自分で立ち直って強く生きていくと思います(46番、女性)」というような、大切な人との関係の破綻に関するテーマが、「攻撃性」が低く「他人への信頼」が高い群では多く(38%)、

他の3群（「攻撃性」が高い、もしくは「他人への信頼が」低い）では少なかった(17~22%)。また、他の3群では見られる、人間関係や仕事でのトラブルによって慢性的に人生に疲れているという物語、例えば「私は特に大きい幸せとか大きい不幸とかもなく、普通の高校にいて普通の大学にいて普通の会社のOLとして勤めて、平凡な特に刺激もない人生を送ってきて、(中略)そんな特徴のない自分が実は昔から嫌で(中略)特に変えることができず(中略)会社でも上司から結構ねちねち言われることも最近多く、また付き合い合ってた彼にも振られて会社でもうまくいかないし、もう自分って何もいいことがないなって思って、お酒を飲みすぎて今もつぶれて人生が嫌になって、途方にくれて家のソファでぐちゃってつぶれている所です。(中略)嫌だしつらいけど私はこのまま普通に会社に行って働いて普通に定年退職して、変化のない老後の毎日を送って、私の人生は終わっていくのだろう。(32番、女性)」のようなプロトコルが見られなかった。

8BMでは、「この背景は実は本の挿絵であって、その本を読んでいるのが、このちょっと濃く書かれた人。この濃く書かれている人は将来医者になりたくてこの本を読んでいるんですけど、この写真がとても印象的であって、普段過ごしているときでも、この写真のことを思い出すことがある(21番、女性)」というような、前景の人物が将来医者になるという物語が、「攻撃性」が低く「他人への信頼」が高い群で最も多く(46%)、「攻撃性」が高く「他人への信頼」が低い群で最も少なかった(18%)。このテーマは坪内(1997)などが通常の筋、よく見られるテーマとして挙げているものである。

図版19では、外は自然の厳しさがあるが家の中は安全というテーマは、他人への信頼が高い2群で多い傾向にあった(22~23%)。一方、「今船が海をずっと進んで、自分の行きたい方向を間違えて、ちょっと怪しげな暗いところに来てしまって、どうしようと今あせっています。(中略)お化けが

こんにちは、大変ですね、こんな暗いところに迷い込んでしまって、ちゃんと私があなたたちの行きたい場所に連れて行くので、すいません、お友達になってくれませんか？っていう話をして、(中略)船はお化けについていって、自分たちの行きたかった方向に戻ることができ、お化けも20人も友達ができてすごくうれしく、よろこびました。(11番、女性)」のような、家や船が危機にみまわれるというテーマは、「攻撃性」が低く「他人への信頼」が高い群では少ない傾向にあった(8%)。

### 「攻撃性」、「自分への信頼」での群分け

女性において、「攻撃性」の高さと「自分への信頼」の低さには相関があったため、群分けをすると人数に偏りが見られた。

「攻撃性」×「他人への信頼」と同じように、「攻撃性」×「自分への信頼」においても、尺度得点で群分けした4群間において、TATのテーマに最も顕著に差が見られたのは図版18BMであった。

18BMでは、「攻撃性」が低く「自分への信頼」が高い群では、人物が能動的に動こうとしていて、それを周りの人に止められているというテーマが多い傾向にあった(56%)。一方、「攻撃性」が高く「自分への信頼」が低い群では少ない傾向にあった(6%)。

「攻撃性」が高く「自分への信頼」が低い群では、人物が受動的に被害を被る、復讐によって被害が連鎖するというテーマが多い傾向にあった(63%)。一方、「攻撃性」が低い2群では少ない傾向にあった(17~19%)。

加えて、「攻撃性」が高く「自分への信頼」が低い群では、「この人自身は実際には普通に家で寝ているんですけど、感覚的に誰かに掴まれているというか、とらわれているというか、ちょっと自由でない。背後からなんで、結構恐怖感のある縛り。それをずっと心の中で感じていて、それが夢の中の感

覚としてでてきているような表情であり、絵に見えます(26番、女性)」「何か縛り付けられてる感じで、すごい自分はしたいことがいっぱいあるけど、なんか世間には通用しなくて、それは間違ってるみたいな。やりたいようにできない感じがします。すごい歯がゆい感じで、何かについて見張られてるみたいな、止められるみたいな感じがします。(14番、女性)」というような、感覚として自由を奪われているというテーマが多い傾向にあった(25%)。これらのプロトコルからは、漠然としたものに受動的に自由を奪われる不安が読み取れる。

「攻撃性」×「他人への信頼」の場合と同じように、手を介添、奉仕と捉えている物語は、「攻撃性」が低い2群にのみ見られた。

3BMでは、「攻撃性」が高く「自分への信頼」が低い群では、慢性的な対人関係や仕事でのストレスによって人生に疲れているという物語が多く(44%)、「攻撃性」が低く「自分への信頼」が高い群では少ない傾向にあった(13%)。また、自分の行為への後悔や能力のなさに対する悲嘆に関するテーマ、例えば「この女性はキャリアウーマンな女性です。(中略)ある時ちよっと失敗してしまい、おっきな失敗だったので、上司にすごく怒られてしまって、(中略)お酒を飲んで帰ってきて、自分の家でくたっとなっていてところです。今気分的には自分が必ずしも悪くないと自分自身を守るところもあったり、反省する部分もあったり(中略)また時間が経てば落ち着いてきて、これからまたがんばろうと、次の日はまた明るい顔で会社に行く、という感じです(47番、女性)」というような物語は、「自分への信頼」が高い2群では多く(26~29%)、「自分への信頼」が低い2群では少なかった(13~17%)。これらのことから、攻撃性が高く自分への信頼が低い群は、人物が外的な要因から慢性的に疲れていると捉える傾向にあり、自分への信頼が高い群は、人物を慢性的に疲れているというよりも、自分のミスなどによっ

で一時的に落ち込んでいると捉える傾向にあると言える。

図版 8 BM では、男性は、「自分への信頼」が低い 2 群の人は、全員（4 人中 4 人）加害行為や死体解剖の場面という物語を作った。「自分への信頼」が低い群でも「攻撃性」が高い群の人は、「これはこの人が昔のことを思い出していて、何かこの人の体を実験の道具みたいなんに昔されたことがあって、その当時のことがすごく今でもい嫌な思いをしてて、この人たちのことを恨んでて、いつか復讐してやろうと思ってるような感じです。（31 番、男性）」のような、前景の人物を死体解剖や人体実験をされる側の人と関係づけられている物語を作った（2 人中 2 人）。一方で、「攻撃性」が低い群の人は、「この前の人何やってるんですかね、分からないですね。後ろは解剖ですかね、解剖かなんかやってて、おそらく前の方は警察官かな。何か殺人事件があって、検死をしてる場面ではないかなと。この物騒なピストル、銃もありますけど。検死をしたことによって犯人を捕まえようというストーリーになるんじゃないかと思います。後ろの方はライトを照らしてるのかな。たぶん今から人を殺そうと言うそういう場面ではないと思います。検死か何かだと思います。前の方の顔も怖いですね、警察に見えない。はい。（33 番、男性）」のような、前景の人物を死体解剖をする側の人と関係づけられている物語を作った（2 人中 2 人）。

図版 1 9 では、外は自然の厳しさがあるが家の中は安全というテーマが、自分への信頼が高い 2 群で多く（25～29%）、自分への信頼が低い群では少なかった（0～6%）。

## 第 5 節 総合考察

信頼感尺度と攻撃性尺度の関係を相関分析によって検討した結果、「自分



への信頼」と攻撃性の下位尺度にのみ相関が見られた。また、相関関係には性別で差があった。男性では「自分への信頼」が高ければ「自責感」「怒り反応」も高いのに対し、女性では「自分への信頼」が低ければ「自責感」「猜疑心」「衝動性」が高いという結果になった。「他人への信頼」と攻撃性尺度の下位尺度には相関がなかった。

これらのことから信頼感と攻撃性の関連は、性別によって差があることが示されたが、信頼感の下位尺度の得点や攻撃性の下位尺度の得点、TATのACS得点には性別による差がなかった。よって、質問紙における信頼感や攻撃性の高さ、TATにおける攻撃性の高さに性差があるのではなく、それらの関連に性差があるということが示唆された。

信頼感尺度ならびに攻撃性尺度とTATのACS得点の関連を分析したところ、男性では「他人への信頼」と図版3BM、19のACS得点に関連があることが示唆された。つまり、男性では「他人への信頼」が低いほど図版3BMや19で攻撃的な物語を作る傾向にあることが示された。図版3BMでは「他人への信頼」が低い人のプロトコルには何か外的な出来事が原因で自傷、自殺企図をし、誰かに助けられて回復するというテーマがみられ、「他人への信頼」が高い人のプロトコルにはそのようなテーマは見られず、悲嘆の原因を自分にあるとする傾向があった。図版19では「他人への信頼」が低い人のプロトコルには、何か被害を受けて攻撃するというテーマ、または呪いとして被害が連鎖するという復讐のテーマがみられた。一方、「他人への信頼」が高い人のプロトコルには攻撃のテーマがあまり表れておらず、安香(1997)が安定した人のテーマとして挙げている、外は自然の厳しさがあるが家の中は安全というテーマが見られた。

女性では「怒り反応」と図版11のACS得点に関連があることが示唆された。つまり、女性では「怒り反応」が低いほど図版11では攻撃的な物語を

作る傾向にあることが示された。また、有意ではないものの、男性では逆の傾向があることが示された。「怒り反応」が低い人は図版 11 で、戦いのテーマをはっきりと語るという傾向が見られ、「怒り反応」が高い人は竜を神秘的なものとしたり、漠然とした襲われる感覚を表す夢という物語を作った。坪内（1984）が動物同士や動物と人間の戦いのテーマを図版 11 の一般的なテーマとして挙げていることや、鈴木（1997）が図版 11 で語り手が攻撃される側に身をおいている場合は語り手が攻撃衝動に気付いているとは言えないと述べていることから、戦いのテーマがはっきりと語られずに、神秘的と体験したり漠然と襲われる不安として体験することと、「怒り反応」が高いことに関連があったのではないかと考えられる。

また、信頼感尺度と攻撃性尺度の高低によって TAT のテーマに差があるかを検討するため、「攻撃性」×「他人への信頼」と「攻撃性」×「自分への信頼」の 2 つの組み合わせで、それぞれ協力者を 4 群に分けた。その結果、どちらの組み合わせにおいても TAT のテーマに最も差が見られたのは図版 18 BM であった。

図版 18 BM において、攻撃性が低く信頼感が高い群では、向こう見ずな行為を止められていたり、警察に捕まっているというテーマが多かったのに対し、攻撃性が高く信頼感が低い群では、人に襲われている、幽霊によって呪い殺されるというテーマ、感覚的に自由を奪われているというテーマが多かった。つまり、前者では人物が能動的に動こうとしているのを止められるというテーマが多かったのに対し、後者では、人物が受動的に襲われたり、自由を奪われるというテーマが多かった。また、幽霊によって呪い殺されるという物語では、最初 A という人物が原因で B という人物が死に、または A に B が殺され、その死んだ恨みから B が幽霊となって呪い、最終的に A も死ぬ、という復讐をテーマとした物語が複数見られた。これらの物語には、

幽霊という漠然としたものに自由を奪われていると体験することや、攻撃されたと体験し、被害感によって攻撃するというパターン現れている。漠然と自由を奪われていることや攻撃されたと体験することを、不安や不信という言葉に置き換えられるとすると、Horney(1937)や Kline(1946)の指摘する、不安や不信と攻撃性の相互作用がテーマとして展開されていると考えられるのではないだろうか。

また図版 3 BM では、攻撃性が低く信頼感が高い群では、他の 3 群に比べて、人物が仕事や人間関係のストレスが原因で慢性的に人生に疲れているとする物語が少ない傾向にあった。その代わりに、「攻撃性」が低く「他人への信頼」が高い群の場合は、大切な人との関係の破綻に関するテーマが多く、「攻撃性」が低く「自分への信頼」が高い群の場合は自分の行為に対する後悔に関するテーマが多かった。

図版 8 BM では、「攻撃性」が低く「他人への信頼」が高い群では、前景の人物が将来医者になるという一般的なテーマが多かった。また男性では、「自分への信頼」が低い 2 群の人は、全員（4 人中 4 人）加害行為や死体解剖の場面という物語を作った。「自分への信頼」が低い群でも「攻撃性」が高い群の人は、前景の人物が死体解剖や人体実験をされる側の人と関係づけられている物語を作り（2 人中 2 人）、「攻撃性」が低い群の人は死体解剖をする側の人と関係づけられている物語を作った（2 人中 2 人）。

図版 19 では、「攻撃性」が低く「他人への信頼」が高い群は、家や船が危機にみまわれるというテーマが少なく、外は危機があるが家の中は安全というテーマが多かった。

全体として、攻撃性が低く信頼感が高い群は、安定しているとみなされるテーマや、一般的と言われているテーマが多い傾向にあり、危機場面の原因を自分の行為や一時的な困難に求める傾向にあった。一方で、攻撃性が高く

信頼感が低い群では、危機場面の原因を外的なものに求める傾向、つまり漠然としたものに襲われるという形で受動的に体験する傾向、または攻撃されたと体験して攻撃することによって、被害が連鎖するという復讐のテーマが多い傾向にあった。したがって、危機を漠然と受動的に体験すること、つまり不安感や不信感の高さが攻撃性の高さに関連することが示唆された。

## 第6節 今後の課題と展開可能性

本研究の課題は2点ある。1点目は男性と女性の人数に差があったことである。そのことによって、尺度得点で群分けしてTATのストーリーを検討する際には、実質女性のプロトコルでの検討になった。

2点目は本研究の協力者のデータに偏りがあったことである。例えば、質問紙の項目を因子分析した際に、多くの項目が削除された。信頼感尺度(1997)では他者からの裏切りに関する項目が複数削除され、攻撃性尺度(2001)では自己破壊行動に関する項目が複数削除された。また、先行研究(葛西・中本,2008;清瀧,2008など)では関連があることが示されていた「他人への信頼」(不信)と攻撃性の下位尺度との間に関連がなかった。よって本研究のデータは、先行研究のデータとは、少し傾向が違っていたのではないかと考えられる。

したがって、今後、広範囲にわたって青年期の健常データを男女同数程度収集し、検討する必要があると考えられる。

今後の展開可能性としては、TATにおいて、危機場面を漠然と自由を奪われる、襲われるというように受動的に体験することや、復讐のテーマを語る事と、現実場面での体験様式や行動様式の関連について検討できればと考える。

## 引用文献

- 安立奈歩（1999）：青年期の境界例心性に関する研究 心理臨床学研究  
17, 4, 354-365.
- 安立奈歩（2001）：攻撃性の諸相に関する研究. 京都大学大学院教育学研究  
科紀要, 47, 475-487.
- 安立奈歩（2003）：攻撃性に関する先行研究の概観. 京都大学大学院教育学  
研究科紀要, 49, 442-454.
- 安香宏・藤田宗和（編）（1997）： TAT 解釈の実際. 新曜社.
- 天貝由美子（1995）：高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. 教育心理学  
研究, 43, 364-371.
- 天貝由美子（1997）：Self-esteem を規定する要因としての信頼感—その生  
涯発達的变化—. カウンセリング研究, 30(2), 103-111.
- 天貝由美子（1999）：一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要  
因. 教育心理学研究, 47 (2), 229 - 238.
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・  
坂井明子（1999）：日本語版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（BAQ）の作成と  
妥当性、信頼性の検討. 心理学研究, 70(5), 384-392.
- Bandura A(1973):Aggression:A social learning analysis.Engelwood  
Cliffs,NJ:Prentice-Hall.
- Björkqvist K, Lagerspetz KMJ, Kaukiainen A(1992):Do girls manipulate and  
boys fight? Developmental trends in regard to direct and indirect  
aggression, Aggress Behav 18, pp. 117-127.
- Bowlby J(1980): Attachment and Loss, Vol.3 Loss. 黒田実郎・吉田恒子・  
横浜恵三子（訳）（1981）：母子関係の理論Ⅲ愛情喪失. 岩崎学術出版.

- 土井真由子(2003):アトピー性皮膚炎患者の TAT 反応をもとにした語りの構成に関する一研究 心理臨床学研究, 20(6), 521-532.
- Dollard J, Doob L, Miller N.E., Mowrer O.H., & Sears R.R. (1939) : Frustration and aggression. New Haven: Yale University Press. 宇津木保(訳)(1959): 欲求不満と暴力. 誠信書房.
- Eagly AH, Steffen VJ (1986) Gender and Aggressive Behavior. A Meta-Analytic Review of the Social Psychological Literature. Psychological Bulletin, 100 (3), pp. 309-330.
- Erikson EH(1959) : Identity and The Life Cycle. International University Press, New York. 小此木啓吾(訳編)(1973): 自我同一性. 誠信書房.
- Ferguson TJ, Rule BG(1983): An Attributional Perspective On Anger And Aggression. In R. G. Geen & E. Donnerstein (Eds.), Aggression: Theoretical and Empirical Reviews: Vol. 1. Theoretical and Method Issues. New York: Academic Press. pp41-74.
- Freud S (1920) 小此木啓吾(訳)(1970): 快樂原則の彼岸. 自我論・不安本能論 フロイト著作集 6. 人文書院.
- Freud S (1929) 浜川祥枝(訳)(1969): 文化への不満. 文化・芸術論 人文書院.
- 福島章(1974): 現代人の攻撃性. ロゴス選書.
- Gerlsma C, Hale WW(1997): Predictive power and construct validity of the Level of Expressed Emotion (LEE) scale: Depressed out-patients and couples from the general community, Br J Psychiatry 170, pp. 520-525.

Hale WW, Van Der Valk I, Engels R, Meeus W (2005) : Does perceived parental rejection make adolescents sad and mad? The association of perceived parental rejection with adolescent depression and aggression. *Journal of Adolescent Health*, 36(6), 466-474.

堀井俊章・榎谷笑子(1995):最早期記憶と対人信頼感との関係について 性格心理学研究, 3, 27-36.

Horney K(1937) : *The Neurotic Personality of Our Time*. W.W.Norton& Company Inc., New York. 我妻洋 (訳) (1973) : ホーナイ全集 現代の神経症的人格. 誠信書房.

板谷順二 (1984) : 心理テストにおける攻撃性. 中尾弘之(編)攻撃性の精神医学. 医学書院, pp158-168.

岩崎徹也(1979) : 攻撃性—精神病理の発生との関連をめぐる精神分析理論. 原俊夫・鹿野達男(編)攻撃性 精神科医の立場から. 岩崎学術出版, pp29-47.

葛西真記子・中本佳男 (2008) : 怒り・攻撃性・抑制と自己信頼・他者信頼からみた高校生の心理 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 23, 117-126.

清瀧裕子 (2008) : 青年期における攻撃行動および自傷行為について. *心理臨床学研究*, 26 (5), 615 - 624.

Kline M(1940) : *Mourning and its Relation to Manic-depressive States*. 西園昌久・牛島定信 (編訳) (1983) : 喪とその躁うつ状態との関係. メラニックライン著作集 3. 誠信書房.

Kline M(1946) : *Notes on Some Schizoid Mechanisms*. 狩野力八郎・渡辺明子 (訳) (1985) : 分裂的機制についての覚書. メラニックライン著作集 4. 誠信書房.

- Lorenz K (1963) : Das sogenannte Böse : zur Naturgeschichte der Aggression.  
日高敏隆・久保和彦(訳) (1970) : 攻撃 悪の自然史. みすず書房.
- 松見淳子 (2002) : 攻撃性の比較文化. 山崎勝之・島井哲志(編) 攻撃性の行動科学. ナカニシヤ出版, pp97-107.
- 西田博文 (1984) : 社会・文化的理解. 中尾弘之(編), 攻撃性の精神医学. 医学書院, pp146-157.
- 西園昌久・狩野力八郎 (2002) : シンポジウム特集 攻撃性とその臨床 巻頭言. 精神分析研究, 46 (3), 266-266.
- 大淵憲一 (1977) : TAT 攻撃反応をめぐる諸問題. 心理学評論, 20(4), 387-413.
- 大淵憲一 (1993) : 人を傷つける心—攻撃性の社会心理学 サイエンス社
- 斉藤文夫 (1995a) : TAT の 8 BM 図版において冷情的攻撃空想を語る非行少年の諸特徴 犯罪心理学研究, 33(1), 29-40.
- 斉藤文夫 (1995b) : TAT による非行少年の攻撃性に関する一考察 犯罪学雑誌, 61(6), 235-247.
- 鹿野達男 (1979) : 攻撃性研究のための一序論. 原俊夫・鹿野達男編, 攻撃性精神科医の立場から. 岩崎学術出版, pp1-28.
- Stone H (1956) : The TAT Aggressive Content Scale J. of. proj. tech, 20, 445-452.
- Storr A (1968) : Human Aggression. 高橋哲郎(訳) (1973) : 人間の攻撃心. 晶文社.
- 鈴木睦夫 (1997) : TAT の世界—物語分析の実際. 誠信書房.
- 鈴木平・春木豊 (1994) : 怒りと循環器系疾患の関連性の検討 健康心理学研究, 7, 1-13.



- 鈴木常元・安齊順子（1999）：抑うつ者の外面的および内面的攻撃性 心理臨床学研究, 16(6), 573-581.
- 高橋雅春(1986)：HTTP テスト. 家族画研究会（編）臨床描画研究Ⅰ. 金剛出版, pp50-67.
- 高橋哲郎（1985）：人間の攻撃性 馬場謙一・福島章・小川捷之・山中康裕（編）攻撃性の深層. 有斐閣, pp1-36.
- 谷本泰子・笠井達夫（2008）：青年期における人間信頼感・自己存在感と攻撃性の関連. 徳島文理大学研究紀要, 76, 65-79.
- 坪内順子（1984）：TAT アナリシス. 垣内出版.
- 上野真弓・丹野義彦・石垣琢磨（2009）：大学生の持つ抑うつ傾向と攻撃性の関連—攻撃性の4つの下位尺度を踏まえて パーソナリティ研究, 18(1), 71-73.
- 和辻哲郎(1962)：和辻哲郎全集 第10巻. 岩波書店.
- 遊間義一（2009）：TAT 分析マニュアル.（未公刊）

## 要約

本研究は、青年期における信頼感と攻撃性との関連を、信頼感尺度(天貝, 1997)、攻撃性尺度(安立, 2001)とTATを用いて多面的に検討することを目的として行った。そのために、一般大学生51名(男性14名, 女性37名, 平均年齢19.4, SD=0.57)を対象に質問紙調査を、48名(男性9名, 女性39名, 平均年齢20.9, SD=1.99)を対象に質問紙調査とTAT図版8枚を実施した。質問紙における信頼感と攻撃性の関連の検討では、「自分への信頼」と攻撃性の下位尺度のみ関連が見られた。次にTATにおける攻撃性をAggressive Content Scale (Stone, 1956) (ACS)によって得点化し、各尺度との関連を検討したところ、男性では図版3BM、19において、「他人への信頼」の低さと、ACS得点の高さに相関があった。また、信頼感尺度と攻撃性尺度の得点の高低で協力者を4群に分け、TATの各図版のテーマに差があるかを検討したところ、攻撃性が高く信頼感が低い群では、危機の原因を外的なもの、または漠然としたものに襲われる、自由を奪われるという形で受動的に体験する傾向があり、信頼感が高く攻撃性が低い群は、自分の行為に原因を求めるという形で体験する傾向にあった。したがって、危機を漠然と受動的に体験すること、つまり不安感や不信感の高さが攻撃性の高さに関連することが示唆された。

## 添付資料

1. 調査協力の依頼書
2. 個別実施の調査で用いた調査協力の同意書
3. 質問紙調査で用いた質問紙

## 調査協力をお願い

兵庫教育大学大学院  
臨床心理学コース  
遠藤ゼミ M2 治井彩  
[aya211marie@yahoo.co.jp](mailto:aya211marie@yahoo.co.jp)

現在、私は青年期の人々が自己の態度をどう捉えているか、他者との関係をどう捉えているか、ということテーマとして修士論文に取り組んでおります。つきましては、皆様お忙しいところ恐縮なのですが、調査にご協力頂ければ幸いです。

調査の内容は質問紙にお答え頂く事と、**Thematic Apperception Test (TAT)**: 絵画統覚検査という心理検査(人物や風景が描かれている図版を見て自由に物語を作る検査です)に協力して頂くことです。場所は兵庫教育大学内の発達心理臨床センターで行います。所要時間は40分~1時間程度です。調査の時期は、後日メールにて個別に日程調整させて頂きたいと思っております。

調査にご協力頂いた方には、ささやかではありますが御礼の品を差し上げます。

何かご質問等ありましたら上記までご連絡下さい。よろしくお願い致します。

- \* 今回の調査の目的は、青年期の人々の一般的傾向を知ることにあります。ですから、TAT検査の結果につきまして、個別のフィードバックはいたしませんので、ご了解ください。すべてのデータを総合して分析した結果は、来年3月頃にフィードバックさせて頂きます。
- \* 今回の調査で得られた個人情報に関しましては、厳重に管理し調査目的以外に使用しないことをお約束いたします。

調査協力者各位

調査者：兵庫教育大学大学院臨床心理学コース

修士課程 2年 治井彩

## 研究調査協力の同意書

- ・ 本研究にご協力いただいて得られた結果は修士論文等に使用させていただきます。その際、個人は特定されない形で全体の傾向として使用いたします。
- ・ TAT を実施する際は IC レコーダーで録音させていただきます。録音記録はテープ起こしをし、文書化します。これらのデータは厳重に保管し、プライバシー保護は万全に致します。研究が完了した段階で録音記録は消去し、文書化データはシュレッダーにて破棄します。
- ・ 研究結果のフィードバックは希望者に郵送させていただきます（来年 3 月頃を予定しています）。調査目的でのご協力のため、全体の傾向のフィードバックのみとさせていただきます。

以上のことに同意していただける方はご署名をお願いいたします。

---

- \* 研究結果のフィードバックの郵送を希望するかどうか、どちらかに○を付けて下さい。希望される方は、以下に住所を記入してください（来年度以降も郵便物を受け取ることができる住所でお願いします）。

フィードバックを      希望する・希望しない

(住所)                      〒

---

## 調査協力をお願い

兵庫教育大学大学院  
学校教育研究科 臨床心理学コース  
遠藤ゼミ 修士課程 2年 治井彩  
[aya211marie@yahoo.co.jp](mailto:aya211marie@yahoo.co.jp)

現在、私は青年期の人々が自己の態度をどう捉えているか、他者との関係をどう捉えているか、ということを経験として修士論文に取り組んでおります。つきましては皆様お忙しいところ恐縮なのですが、調査にご協力いただければ幸いです。

調査結果は研究目的以外に使用しないことをお約束いたしますので、思う通り回答してください。回答している途中でしんどくなってしまった場合は、途中でやめていただいてもかまいません。

何かご質問等ありましたら上記までご連絡下さい。よろしくお願い致します。

・下記にご記入をよろしくお願いいたします

所属コース ( )

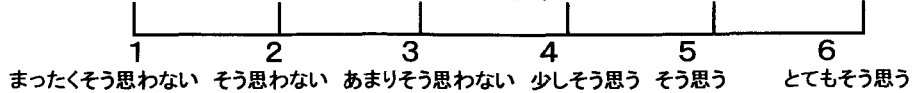
学年 学部・院 ( )

年齢 ( )

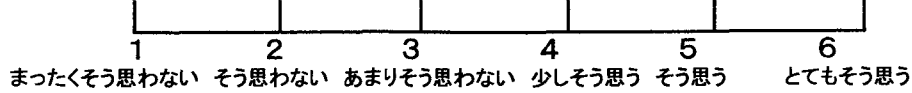
性別 (男・女)

1. 以下の質問の答えとして、当てはまるものの数字を○で囲んでください。

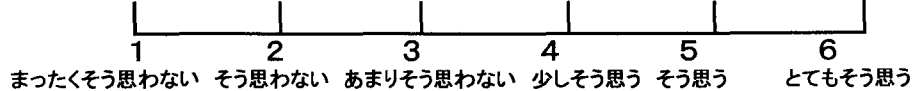
1 無理をしなくてもこの先の人生でも、私は信頼できる人と出会えるような気がする。



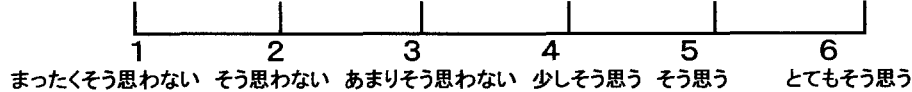
2 私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う。



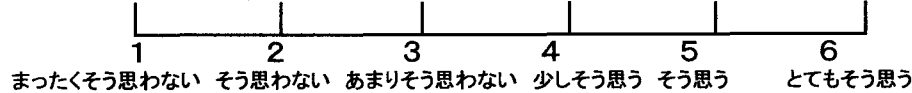
3 これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる。



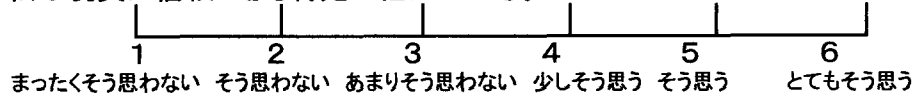
4 今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う。



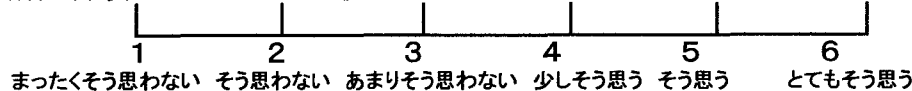
5 私の地位や立場が変われば、私自身も今とはまったく違う人間になるだろう。



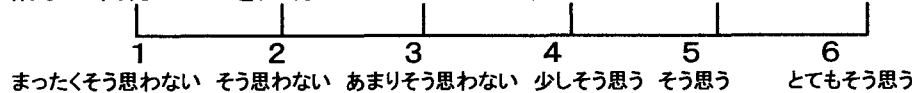
6 私は現実に信頼できる特定の他人がいる。



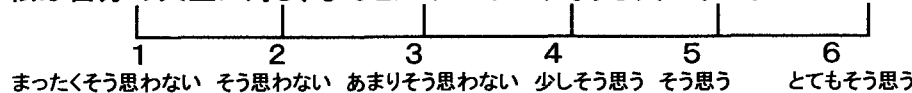
7 所詮、周りは敵ばかりだと感じる。



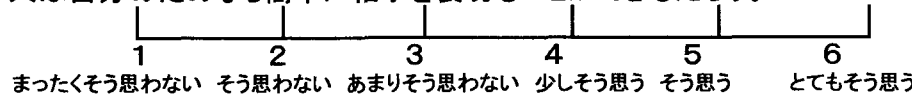
8 相手が自分のことを大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるからだ。



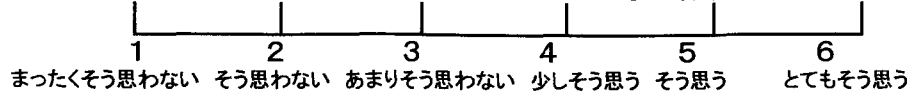
9 私は自分の人生に対し、なんとかやっていけそうな気がする。



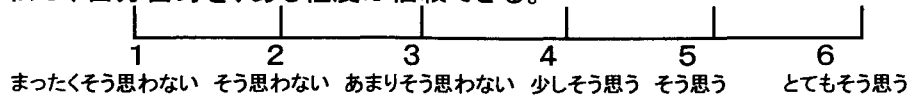
10 人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう。



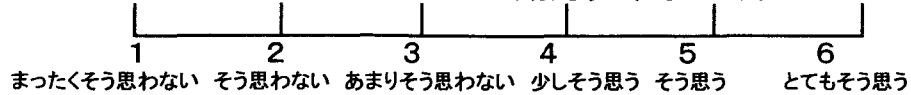
11 私は私で、決して他人にはとってかわることのできない存在であると思う。



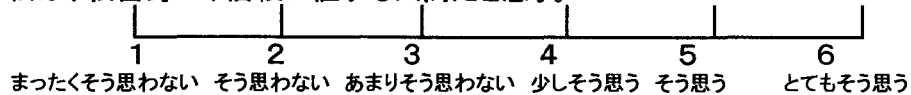
12 私は、自分自身を、ある程度は信頼できる。



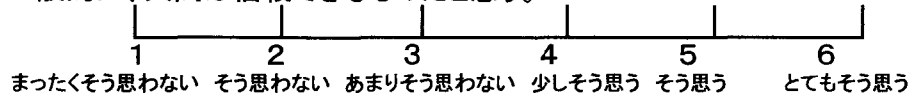
13 気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込もうとするだろう。



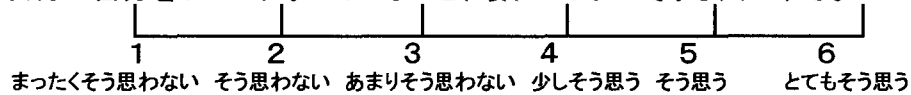
14 私は、私自身が、信頼に値する人間だと思う。



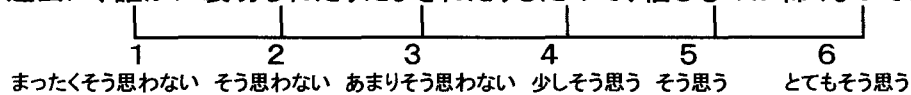
15 一般的に、人間は信頼できるものだと思う。



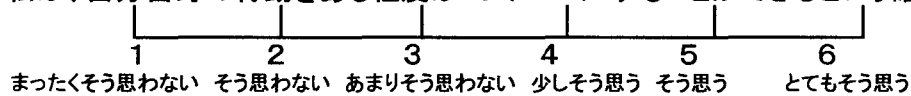
16 自分で自分をしっかり守っていないと、壊れてしまいそうな気がする。



17 過去に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが怖くなっている。



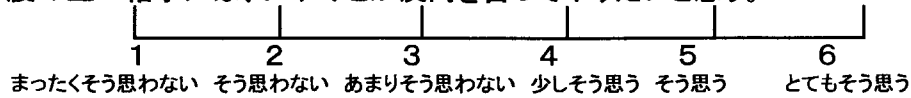
18 私は、自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信を持っている。



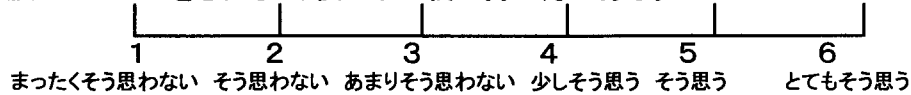


1. 以下の質問の答えとして、当てはまるものの数字を○で囲んでください。

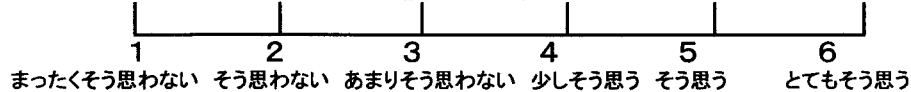
1 腹の立つ相手には、いやみとか皮肉を言ってやりたいと思う。



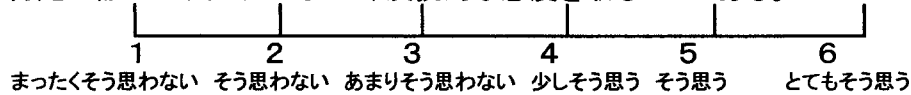
2 腹の立つことをされると、後々まで根に持つ方である。



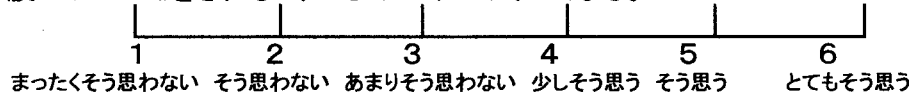
3 自分と考えの合わない人のことを、心から受け入れることはできない。



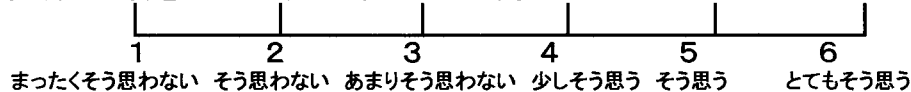
4 特定の誰かが気に入らなくて、反抗的な態度を取ることがある。



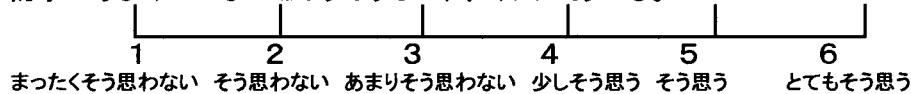
5 腹の立つことをされると、にらみつけてやりたくなる。



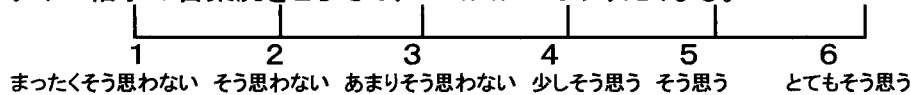
6 批判や忠告をされると、内心恨んでしまう。



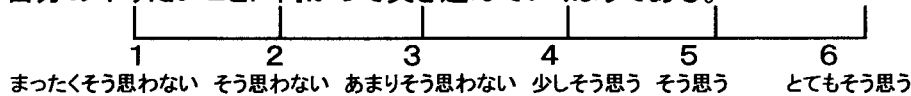
7 物事がうまくいかないときイライラして、すぐ人にあたる。



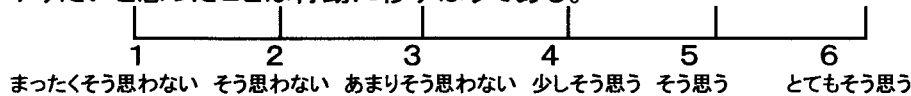
8 すぐに相手の言葉尻をとらえて、つかかかってやりたくなる。



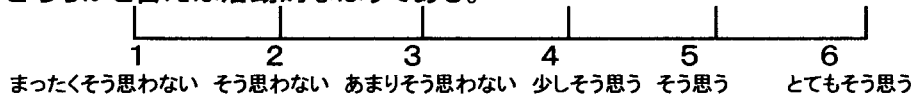
9 自分のやりたいことに向かって突き進んでいくほうである。



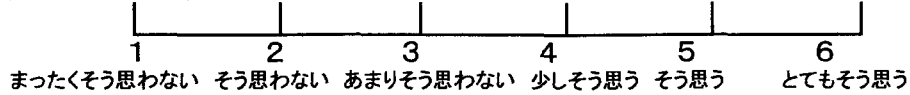
10 やりたいと思ったことは行動に移すほうである。



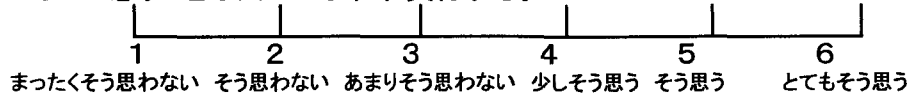
11 どちらかと言えば活動的なほうである。



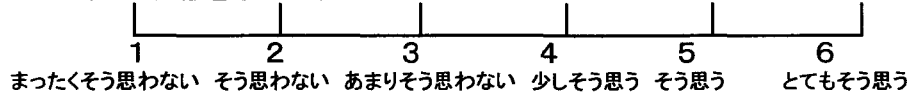
12 何事にも恐れず立ち向かっていく方である。



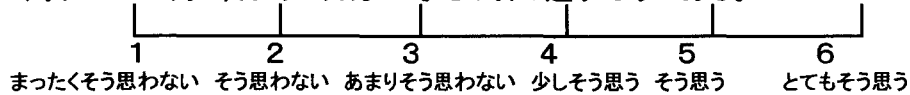
13 正しいと思うことは人にかまわず実行する。



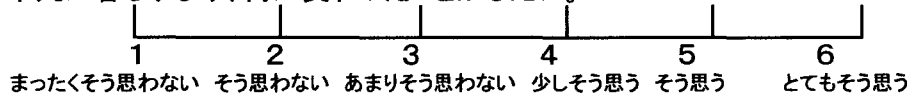
14 いつも何か刺激を求める。



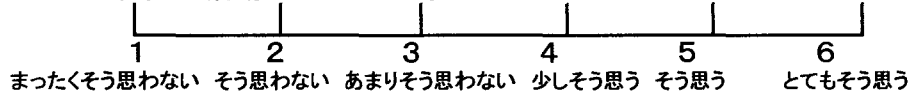
15 周りの人が何と言おうと自分の考えは押し通すほうである。



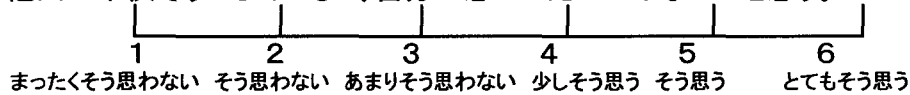
16 平凡に暮らすより、何か変わったことがしたい。



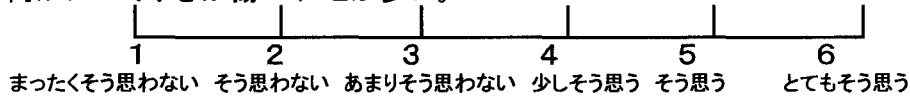
17 いろんな世間の活動がしてみたい。



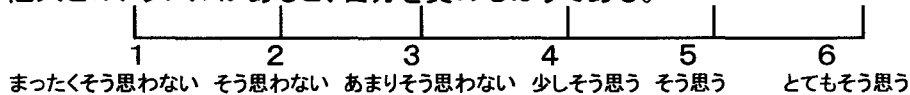
18 他人が不快そうにしていると、自分が悪かったのではないかと思う。



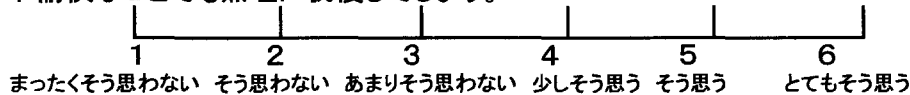
19 何かにつけ、心が傷つくことが多い。



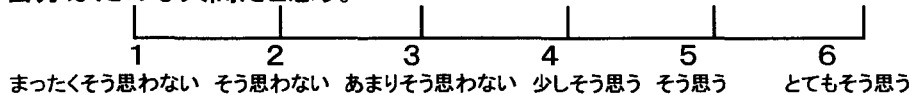
20 他人とのトラブルがあると、自分を責めるほうである。



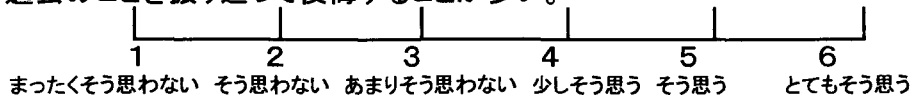
21 不愉快なことでも無理に我慢してしまう。



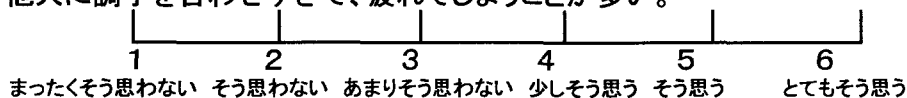
22 自分はだめな人間だと思う。



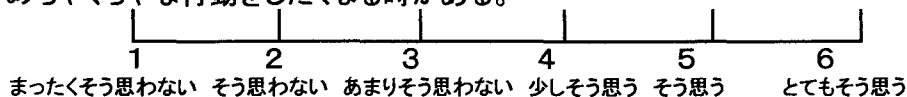
23 過去のことを振り返って後悔することが多い。



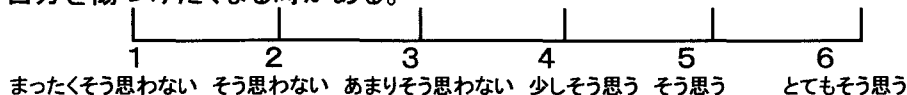
24 他人に調子を合わせすぎて、疲れてしまうことが多い。



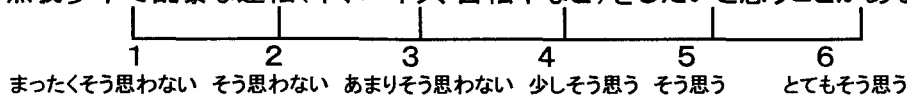
25 めちゃくちゃな行動をしたくなる時がある。



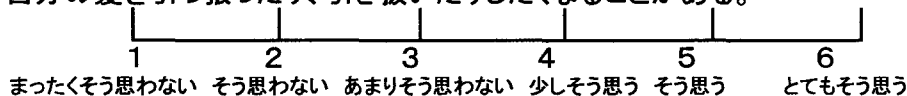
26 自分を傷つけたくなる時がある。



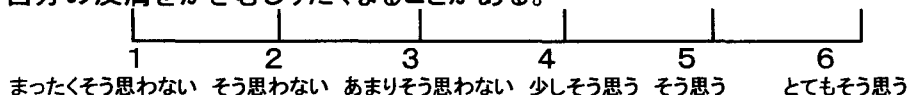
27 無我夢中で乱暴な運転(車、バイク、自転車など)をしたいと思うことがある。



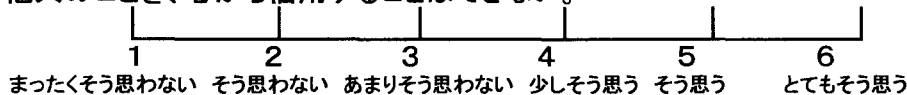
28 自分の髪を引っ張ったり、引き抜いたりしたくなる時がある。



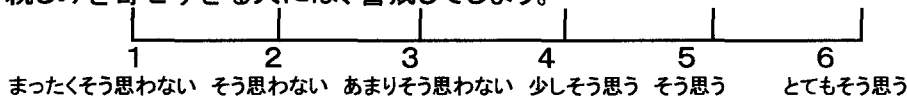
29 自分の皮膚をかきむしりたくなる時がある。



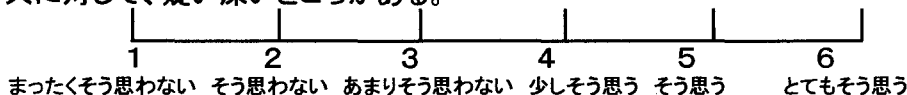
30 他人のことを、心から信用することはできない。



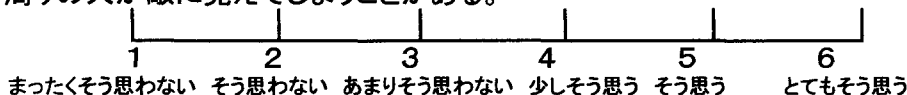
31 親しみを寄せすぎる人には、警戒してしまう。



32 人に対して、疑い深いところがある。



33 周りの人が敵に見えてしまうことがある。



ご協力ありがとうございました。

## 謝辞

本論文を作成するにあたって、たくさんの方々のご指導やご協力、お力添えを頂きました。

指導教員の遠藤裕乃先生には、大学院生活 2 年間を通して本当に多くのことを教えて頂きました。お忙しい中でも、いつも丁寧で的確な指導をしてくださり、温かく見守って下さいました。また、調査協力者の募集の際にも大変お世話になりました。心より深謝申し上げます。

遊間義一先生には、特に TAT に関して貴重なご示唆や資料を頂き、本研究全般に関しても、多くのご助言や励ましの言葉を頂きました。深く御礼申し上げます。

調査協力者募集の際には多くの先生方に授業時間を割いて頂き、協力者が集まりやすいように声かけをしてくださり、励ましの言葉を頂きました。また、臨床心理学コースの先生方には、発表会等でご指導やコメントを頂き、お世話になりました。調査に協力して下さった方々、特に個別の調査に協力して下さった方々には、かなり負担の大きい調査であるにもかかわらず、快く引き受けてくださり、熱心に取り組んで頂きまして、大変感謝しております。

最後になりましたが、同ゼミの神埼歩さん、西田晴香さん、山路彩子さんには苦しい時に助けられ、励まされ、元気をもらいました。また、多忙な中でスコアリングを手伝って頂きました。同ゼミ室の市井ゼミの皆さんにもお世話になりました。また同コースの友人である鎌田里瑛子さんには日頃から支えてもらい、相談する中で多くの発見がありました。

本論文を作成するにあたってお世話になった皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

2010 年 12 月

治井彩